Yamanashiken Nakakomagun Tatomicho

山梨県中巨摩郡田富町

町内遺跡詳細分布調査報告書

2002. 3

田富町教育委員会

Yamanashiken Nakakomagun Tatomicho

山梨県中巨摩郡田富町

町内遺跡詳細分布調査報告書

2002. 3

田富町教育委員会

序

田富町は、甲府盆地の最南端、釜無川と笛吹川の合流点に位置し、地形は北西部から南東部にかけてゆるやかに傾斜し、南北に長い細長い形をした町です。明治８（1874）年に江戸時代の十ヶ村が小井川村、花輪村、忍村に統合され、昭和16（1941）年に合併により田富村となり、昭和43（1968）年に町制施行いたしたものであります。本町は、旧来その豊かな水利と肥沃な土壌を生かした農業を主要産業としてきましたが、甲府市の近郊に位置することから昭和40年代にはベッドタウンとして開発が進み、人口が急増し、昭和43（1968）年の5143人が現在では16501人までに増加しています。この間、工場、山梨県流通団地、大規模小売店舗の進出、また、県環状道路工事の進捗等により、その姿は大きく変貌してまいりました。

このような本町の歴史は、昭和56（1981）年に発行された『田富町誌』にまとめられていますが、地元に伝えられる古文書等により輪郭がはっきりしてくる戦国時代以降に比較して、それ以前は『中右記』元永２（1119）年の記載に「布施荘」の名が初見されて以後、「布施」「小井河」「はなは」等の地名が平安末期から室町期の古記録に散見される以外は町内の神社に関する伝承が棟札に記載されている程度で、ほとんどわかっていないのが現状です。また、たびたび大きな水害があり、古い建造物が残存しないことから、中世以前は住民がほとんどいなかったと認識している人も多く、遺跡等の存在はないと考えている人が多数を占めています。

そのような地元の認識の中で実施された今回の町内遺跡分布調査では、数は少ないながら幾つかの遺跡包蔵地が発見され、その中には中世以前のものが含まれていたことは、従来の認識をあらためる貴重な成果であると思います。また、今回の調査で近世の堤防遺跡調査も併せて実施したこと、古文献・古地図を調査した結果、町東部を中心に古代の条里制の跡が見受けられること等、従来郷土の歴史で認識されていなかった事実を掘り起こすことができました。

今後は今回の調査成果を町の発展のために十二分に活用していくことが必要になると存じます。そして、開発と文化財保護を両立させるよう留意しなければなりません。最後に今回の町内遺跡分布調査にご理解とご協力を賜りました町民の皆様及び調査関係者の皆様に厚く御礼申し上げ、序文にかえさせていただきます。

田富町教育委員会
教育長　**田　中　浩一郎**

例　言

1．本書は、山梨県中巨摩郡田富町の町内全域を対象とした遺跡詳細分布調査の報告書である。

2．分布調査および本書の刊行については、平成13年度の国庫補助金および県補助金を得て実施したものである。

3．分布調査は田富町内遺跡分布調査会に委託し実施した。

4．本書の執筆は、第１・３・４章第２・３節を保坂康夫、第２章村石眞澄、第４章第１節森原明廣、第４章第４節萩原三雄・山下孝司・閏間俊明・秋山圭子、第４章第５節畑大介、第４章第６節鈴木茂・山形秀樹・黒澤一男（パレオ・ラボ）、第５章萩原三雄が行った。編集作業は萩原、畑、村石、森原、保坂が協議して行った。

5．本書にかかわる採集遺物および図面、写真は、田富町教育委員会が保管している。

6．分布調査から報告書刊行までに、次の方々からご指導、ご協力いただいた。記して衷心より御礼申し上げる次第である（順不同、敬称略）。

山梨県教育委員会学術文化財課、帝京大学山梨文化財研究所、河西学、秋山敬

試掘調査協力者

山梨県新環状・西関東道路建設事務所、竹野一郎、窪田幸男、田中浩一郎、斉藤雅浩、保坂武、保坂文男（宝珠院檀家総代）、有田英作、興津眞澄

堤防遺跡調査協力

河澄一雄、早川忠夫、田草川紀男、石原貞雄、竹野豊、内藤和久

田富町文化財審議会関係

石原洋（教育委員長）、河西茂雄（会長）、田中重信（会長職務代理）、樋泉明、石原貞雄、河西文夫（以上委員）、

目　次

序
例言
目次
挿図目次・表目次・写真図版目次

第１章　調査に至る経過と方法（保坂）…… 1

第２章　微地形環境（村石）…… 2
　第１節　田富町地形概観 …… 2
　第２節　微地形分類 …… 2

第３章　歴史・地理的環境（保坂）…… 6

第４章　遺跡の分布と概要 …… 7
　第１節　確認された遺跡と遺物（森原）…… 7
　第２節　試掘調査の成果（保坂）…… 17
　第３節　条里型地割と条里推定地域の設定（保坂）…… 22
　第４節　城館跡の調査（萩原・山下・閏間・秋山）…… 24
　第５節　堤防遺跡（畑）…… 27
　第６節　自然科学分析 …… 32
　　放射性炭素年代測定（山形）…… 32
　　田富町試掘試料の花粉化石（鈴木）…… 34
　　田富町内遺跡調査試料のプラント・オパール（鈴木）…… 40
　　田富町内遺跡の珪藻化石（黒澤）…… 44

第５章　まとめ（萩原）…… 47

報告書抄録

挿図目次

第１図　田富町位置図 …… 2
第２図　微地形分類図 …… 4
第３図　田富町遺跡分布図 …… 15・16
第４図　試掘坑設定地点と既存データの位置および地下断面推定図 …… 17
第５図　試掘坑断面図 …… 18

第６図　田富町内のボーリングデータおよび玉穂町試掘データ …… 19
第７図　明治28年の地図（部分） …… 22
第８図　条里地域推定図 …… 23
第９図　『甲斐国志』等にみられる在地土豪層の本拠 …… 25
第10図　堤防遺跡等分布図 …… 28
第11図　花粉化石分布図 …… 36
第12図　プラント・オパール分布図 …… 41
第13図　珪藻化石分布図 …… 45

表　目　次

第１表　田富町遺跡詳細分布調査確認遺跡および遺物散布地一覧 …… 9
第２表　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果 …… 33
第３表　産出花粉化石一覧表 …… 35
第４表　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数 …… 40

写真図版目次

写真１　1962年国土地理院撮影空中写真 …… 5
写真２　確認された遺物（１） …… 10
写真３　確認された遺物（２） …… 11
写真４　確認された遺物（３） …… 12
写真５　確認された遺跡（１） …… 13
写真６　確認された遺跡（２） …… 14
写真７　試掘坑土層断面 …… 20
写真８　三井右近丞屋敷跡 …… 24
写真９　中澤五郎右衛門屋敷跡 …… 26
写真10　田中氏屋敷跡 …… 26
写真11　花輪村略図 …… 29
写真12　忍村略図 …… 29
写真13　田富町内試掘試料№.１の花粉化石 …… 39
写真14　田富町内試掘試料のプラント・オパール …… 43
写真15　珪藻化石の顕微鏡写真 …… 46

第１章　調査に至る経過と方法

調査経過

田富町は、小井川や布施の地名が平安時代末の古文書に現れる古い土地柄である。また、一辺109mの方形区画で奈良・平安時代の圃場整備跡である条里型地割の存在がかねてから指摘されていた。さらに、信玄堤の一端とされる古い堤防跡が存在することが指摘されるなど遺跡の存在が想定されていた。しかし、これまでの遺跡分布資料には田富町内に遺跡は記載されていない状態であった。

文化財保護法では第57条の４で埋蔵文化財の所在に関する資料を当該地域の教育委員会が整備し、その成果の普及につとめなけらばならないとしている。開発行為が進む中で予想されている遺跡が認識されずに破壊されることを避けるため、当教育委員会では埋蔵文化財の資料整備のための分布調査を、国、県の補助金を得て実施することとした。

分布調査は田富町内遺跡分布調査会に委託して実施した。平成13年10月22日に発足式を行い、調査内容について協議し、関係者から指導・助言をいただいた。平成13年12月24日には試掘結果や微地形調査・堤防遺跡調査などの中間報告会を実施した。平成14年２月３日に踏査結果の報告会を実施した。平成14年３月26日に田富町内遺跡分布調査会から調査結果の報告を受けた。

調査組織

田富町内遺跡分布調査会

会　　長　萩原三雄

調査委員　秋山圭子、伊藤正彦、閏間俊明、岡野秀典、櫛原功一、斉藤秀樹、佐々木満、田中大輔、畑大介、平野修、保阪太一、保坂康夫、宮澤公雄、村石眞澄、森原明廣、山下孝司

事務員　　五味芳子

指導助言　樋泉明

事務局

教育長　　田中浩一郎

教育次長　田中久雄

副主幹　　田中正清

副主査　　森本博文

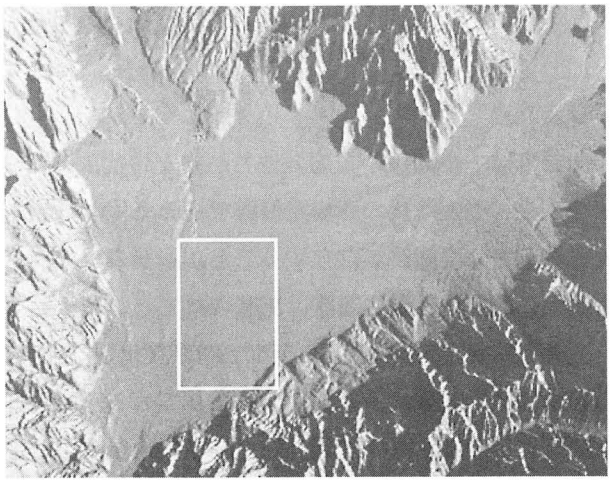
調査の方法

まず、踏査による表面採集を実施して、遺物や遺構の有無の確認作業を実施した。遺物は近世までのものを対象とした（第４章第１節）。遺構については堤防遺跡と屋敷・館跡を対象とした。堤防遺跡（第４章第５節）や屋敷・館跡（第４章第４節）ともに、地元の伝承や古地図を取材し、現地で確認する方法を取った。また、条里型地割については、明治28年の地籍図をもとに図上で確認することとした（第４章第３節）。調査は平成13年10月から平成14年２月にかけて実施した。さらに遺跡立地の特徴を把握するための微地形分析を実施した（第２章）。

こうした、踏査や文献調査とは別に、実際に地中を掘削する試掘調査を実施して遺物・遺構の有無の確認作業を実施した（第４章第２節）。平成13年12月15・16日、平成14年２月20日の３日間実施した。試掘調査では土層断面の観察を行うとともに、水田層や地表環境の復元のためのプラント・オパール分析、土層の年代や周辺の植生環境の復元のための花粉分析、遺跡立地で必要な土地の陸化の有無の確認などの堆積環境の検討のための珪藻分析、炭素14年代測定を行うため、土壌サンプルや木材の採取作業を実施した（第４章第６節）。

第２章 微地形環境

第１節　田富町地形概観



第１図　田富町位置図

甲府盆地の最南端に位置する田富町は、西側を流れる釜無川と南側を流れる笛吹川の堆積作用によって生じた沖積地、すなわち氾濫原地帯であって、隣接する玉穂町・昭和町とともに、県下では最も平坦な町である（田富町誌編纂委員会1981）。微高地の形態から見ると笛吹川よりも釜無川の影響が色濃く、主要なものはいずれも釜無川の流路と近似して南北方向に細長くなっている。この地域を対象とする地形学的な検討は、次のように高木勇夫（1985）による成果がある。釜無川扇状地は、甲府盆地に発達する扇状地のなかでは扇状地面積、岩屑供給域面積、高度差が最大で、しかも平均傾斜が最も緩やかな扇状地として、釜無川扇状地の微地形分類図を作成している。さらに微高地と旧河道の配置に注目し、竜王町を中心とする北半部と田富町・玉穂町を中心とする南半部に差違のあることを指摘している。微高地の分布密度は北半部に高く、南半部に低いこと、微高地の長軸方向が北半部ではNW-SE方向であるが、南半部ではN-S方向からさらにNE-SW方向を示すこと、旧河道は北半部では網状流跡を示すが、南半部では旧河道の分布が少なく、網状流跡を示さないことなどである。南半部のN-S方向に配列する微高地は、釜無川や荒川、笛吹川の溢流堆積によって形成された自然堤防であり、その背後の低地は氾濫盆状地であるとしている。また釜無川の堆積が活発に行なわれるため、笛吹川の下流部を閉塞した状態としている。この特徴は、２つの大河川が下流側にある狭窄部の直前で合流するため、狭窄部の流下能力と合流による流量の増加によって一層増加される。その結果、甲西町の東南湖や西南湖よりも下流側では、増水時になると狭窄部のダムアップによる逆流の影響を受け、低湿で湛水しやすい地域を形成しているという。

第２節　微地形分類

微地形分類の方法

高木（1985）が作成した釜無川扇状地微地形分類図（1/80000）は地形環境を概観するには優れているが、遺跡を巡る地形環境を考察する基礎資料としては縮尺が十分でないため、1/25000の微地形分類図を作成した。空中写真は、米軍が1947 年に撮影した1/40000[(1)]と建設省国土地理院が1962年に撮影した1/20000（写真１）[(2)]を使用した。地形分類にあたっては、空中写真の実体視から得られる比高差や乾湿などの土地自体の性質と、これに対応した水田・畑・宅地などの土地利用を目安とした。遺跡立地に関わる土地条件を示すことを目的とするため、地形成因を明らかにする地形学的な分類とは差異がある。

田富町の地形は大まかに見て微高地と河道・旧河道に大別される。釜無川の新旧の河道とこれらの間に配置される細長い島状の微高地が大半を占め、この南端に笛吹川の河道が位置する。以下に、地形分類ごとに基準や着目点を記す[(3)]。

丘陵：曽根丘陵の南西端である。

扇状地：「氾濫原」との境界が釜無川によって削られ侵蝕崖をなす赤石山脈東麓複合扇状地と曽根丘陵から発する急傾斜の扇状地がある。

微高地ａ：空中写真の実体視では周囲との比高差が比較的明瞭に認められる。土蔵をもつような古い屋敷地をもつ農家や寺社はほとんどがこの分類に立地している。とくに浅原橋以南の今福、今福新田、藤巻などの集落をのせるものは周囲との比高差がとくに顕著である。またこれらの集落内に立地する古い家屋は石垣上に建てられているものが多い。湛水時の被害を最小限にするためであろう。

微高地ｂ：1947年11月撮影の空中写真では、周囲より明るい灰白色として明瞭に認められる。しかし微高地aと異なり古い集落がほとんど立地せず、実体視でも比高差はわずかしか感じられない。また1962年夏撮影の空中写真では、釜無川に近い部分の色調が周囲よりも若干明るいが、釜無川から東に離れるに従い色調の違いが減じて判読が困難となってくる。周囲との色調差がわずかである理由は、地下水位面との比高差が少なく年間を通じて高燥な土地ではないためと推測される。夏と冬では土地の含水状態が大きく異なり、夏には十分に乾燥が進まず暗い色調となっているものと思われる。こうした極めて低平な微高地であることが、先に述べたように古い集落が立地しない理由と思われる。この微高地bの長軸はNNW-SSEの傾きをもち、ほぼNNE-SSWの傾きをもつ微高地ａと微妙な違いが認められる。またこの微高地bが微高地aを寸断していることも観察される。具体的には東花輪駅から南へ伸びる微高地ａや藤巻集落をのせる微高地aの北端の平面形が紡錘形[(4)]でなく東西に切られたような形状であり、この部分に微高地bが入り込んでいることである。この点から概ね微高地aが形成された後、釜無川の西側からの氾濫により微高地ａを削りとり微高地ｂが堆積したものと考えられる。

氾濫盆状地ａ：氾濫盆状地ｂよりわずかに明るくテクスチャー（きめ）が粗く、これよりも高く乾いた土地である。微高地ａ・ｂに比べるとやや暗く低く古くからの宅地はほとんどない。氾濫盆状地ｂからみるとわずかに高く微高地的である。地形成因としてはいくつかの要素を含んでいるが、遺跡分布を考察する土地条件を明らかにするためにここでは分類した。この名称は高木（1985）が釜無川や荒川、笛吹川の溢流堆積によって形成された自然堤防の背後の低地を「氾濫盆状地」としていることに従った。

氾濫盆状地ｂ：1962年撮影の写真では、氾濫盆状地ａに比べて色調が暗く、テクスチャー（きめ）が緻密でのっぺりとしている。西から合流する御勅使川の強い勢いによって釜無川が盆地内に流入し、田富町の東側を流れた際に形成されたものと考えられる。古くからの宅地は例外を除いてない。

氾濫原：釜無川・笛吹川の現河道を中心とする氾濫原。氾濫盆状地よりも新しいもの。

現氾濫原：近代の連絡堤防に囲まれた釜無川・笛吹川の現氾濫原。

微高地の形成年代

試掘調査の成果から古墳時代以降数mもの厚い河川堆積物の存在が知られ、微地形の形成が古墳時代以降であることが推定される。また第４章第４節城館跡では典型的な「一村一屋敷」と指摘された微高地における在地土豪層の屋敷の濃密な分布があり、これからして遅くとも中世・戦国期には微高地が形成されていたことがうかがわれる。

註

(1) ここでは提示していないが米軍が1947年に撮影した写真（整理番号：M662-20～21）には、山之神付近に樋泉（2000）の調査によって明らかになった立川飛行機甲府製造所跡が認められる。ただし、建物の位置関係については樋泉（2000）の記述と南北が逆転して、空中写真では工場と思われる大きな建物が北にあり、その南に比較的小さな建物が数棟認められる。

(2) 写真整理番号：CB-62-10X C11-10~11・C12-8~11・C13-9~11

(3) 地形分類の名称については浅川一郎氏から教示を得た。

(4) 鍛冶新居集落をのせる微高地は典型的な紡錘形である。

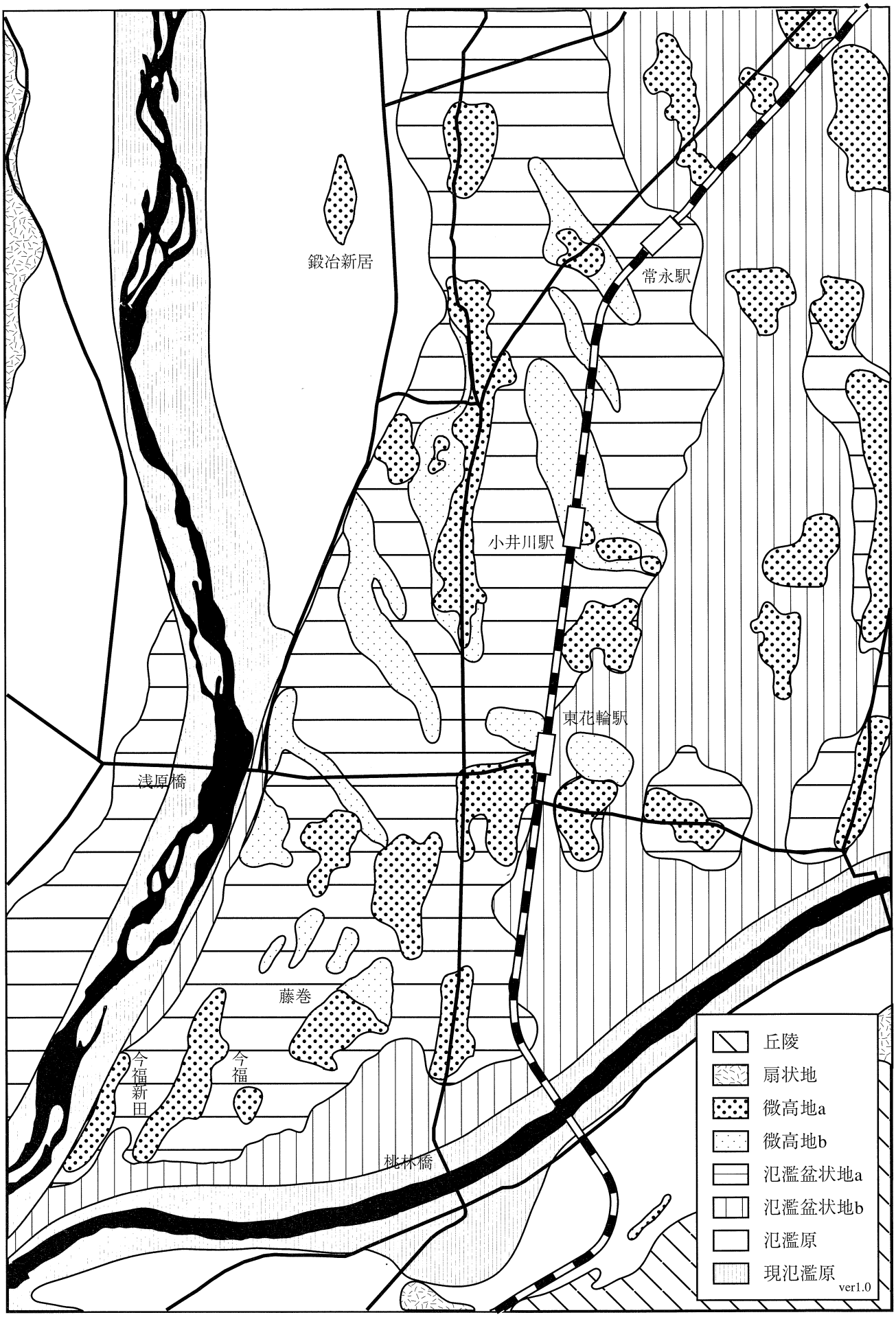
引用文献

田富町誌編纂委員会 1981 「第１章　位置と地形」『田富町誌』ｐ15-30

高木勇夫 1985 「盆地の地形」「甲府盆地の条里地域と自然環境」『条里地域の自然環境』ｐ23-38、58-82

樋泉　明 2000 「立川飛行機甲府製造所跡」『山梨の戦争遺跡』山梨日日新聞社　p79-81

この考察は、平成12年度科学研究費補助金（奨励研究B）「甲府盆地における微地形分類に基づいた古環境復元と遺跡立地の考察」の成果の一部である。



第２図　微地形分類図（1/25000）

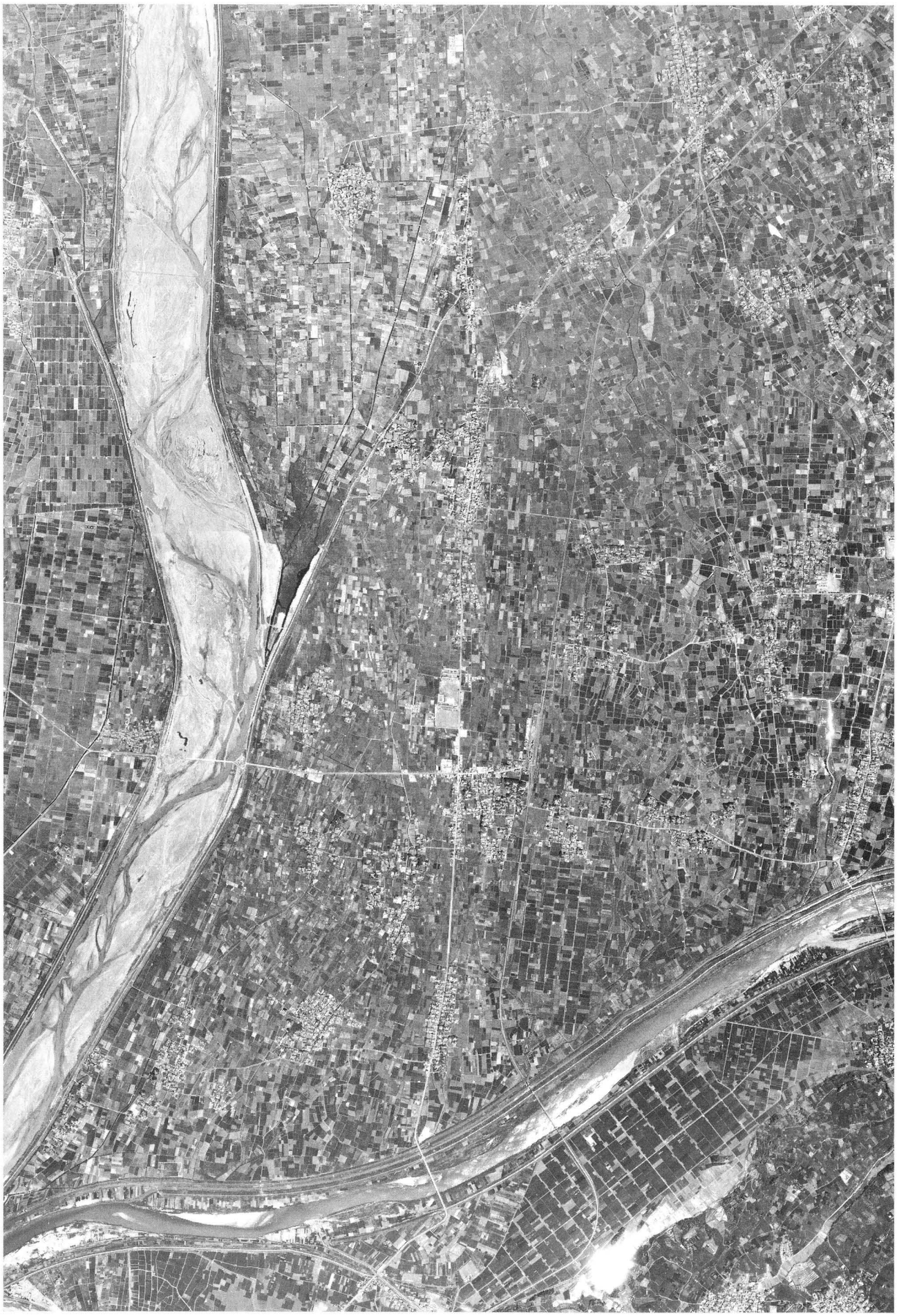


写真１　1962年国土地理院撮影空中写真（第２図に合せて約1/25000とした）

第３章　歴史・地理的環境

歴史・地理的環境を考えた場合、現在は田富町の西境を流れる釜無川の流路の在り方が問題となる。釜無川は中世には竜王町から昭和町の北を通り甲府市の南部で笛吹川と合流していたとされる。[1] また、御勅使川は古代・中世に御勅使川扇状地の南部に流路があったという論議があり、[2] その河道が田富町域に至っていた可能性も考える必要がある。この点からも古代・中世頃の田富町の地理環境は現在と大きく異なっていた可能性がある。

田富町内の地名についてはかなり古い時点で初出する。今は失われた地名ではあるが、奈胡郷の中に大豆生田という小地名があり天正年間に流失したと『甲斐国志』が記載しているが、その中で今福にも大豆生田川原という小地名があることを指摘している。大豆生田は、安和２年（969）の「法勝院領目録」にみえる市河荘内の「甦太」に比定する説がある。[3] 小井川の地名が「安楽寺院等庄園録案」に安元２年（1176）に小井河荘として現われ、布施については元永２年（1119）に「中右記」に布施荘として現われる。[4] また、布施の穂見八幡宮の文安６年の再建棟札に、仁安元年（1166）に造立と記されていることが『甲斐国志』にみえ、藤巻の鈴鹿神社の神殿の文化５年の再建棟札にも仁安２年（1167）造立とみえる。[5] さらに、条里型地割の存在が戦後まもなくから指摘されており、[6] 田富町の歴史が古代に遡る可能性は十分に認められていた。

中世になってから初出する地名についても、花輪が文和３年（1354）に「はなは」として現われ（「岩手県中世文書上、新渡戸文書」）、今福村が永禄４年（1561、「番帳」）、藤巻郷が元亀２年（1571、「武田家印判状」）、山神郷が天正２年（1574、「武田家印判状」）、大田和村が天正４年（1576、「武田家印判状写」）、臼井阿原村が天正10年（1582、「徳川家康印判状写」）と田富町内の地名のほとんどが出揃う状況である。[4]

隣の玉穂町では小井川駅に近い上三条の三宮司遺跡で弥生時代後期と平安時代の土器が、下三条の竹之花遺跡から古墳時代の土器が確認されており、条里型地割や弘仁から藤原期にかけての薬師如来座象がある下三条の歓盛院など、この付近が古代の遺跡の集中地であることが指摘されていた。[7] こうした遺跡が田富町内に連続することはほぼ確実と思われた。

また、「武田系図」に「奈胡郷土手外七郷」として甲西町奈胡・和泉・田島、若草町藤田・浅原とともに、田富町今福・藤巻をあげており、『甲斐国志』ではこの地域を中世の奈胡荘と推定している。田富町南部地域は甲西町や若草町域と連続する地域とされていた可能性が高い。[8] 甲西町や若草町は弥生時代以降特に古代の遺跡集中地域であり、こうした遺跡が田富町域に連続していた可能性もある。

註

(1)　安達　満 1977・78 「釜無川治水の発展過程(1)・(2)」『甲斐路』30・32号
　　川﨑　剛 1994 「釜無川の流路変遷について」『武田氏研究』13号　など
(2)　保坂康夫 2002 「御勅使川の流路変遷にかかわる最近の考古学的知見」『甲斐路』100号
(3)　田富町 1981 『田富町誌』
(4)　平凡社 1995 『山梨県の地名』
(5)　山梨県 1996 『山梨県棟札調査報告書　国中Ⅰ』
(6)　須藤賢・谷岡武雄 1951 「甲斐條里の諸問題」『地理学評論』第24巻４号
(7)　玉穂町教育委員会 1995 『町内遺跡詳細分布調査報告書』
(8)　平山　優 1997 「荘園の解体と郷村」『荘園と村を歩く』校倉書房

第４章　遺跡の分布と概要

第１節　確認された遺跡と遺物

今回の分布調査は田富町域を15地区に分割し、各調査員が表面採集調査を行い、遺跡の存在有無および内容を確認する形で実施された。ここでは、調査によって確認された城館跡と堤防遺跡以外の遺跡16ヵ所について記述する。

なお、確認された遺跡のうち、弥生時代・古墳時代・古代の遺物が採集されたものについては、その立地等から見て、確実に遺跡であると断言はできないものも含まれている。しかし、少なくとも地表面に遺物が散布していた「遺物散布地」であることは間違いなく、文化財保護の観点から注意が必要な地点と位置づけられるものである。

No.１　上手新田（かみてしんでん）遺跡

鍛冶新居集落の北側に位置し、採集された遺物は１の土師器である。小破片ではあるが、形状・質から古墳時代前期の小型壺の体部に相当するものと考えられる。採集された遺物から、上手新田遺跡は古墳時代前期の遺跡と考えられる。

No.２　臼井阿原上河原（かみがわら）遺跡

山之神集落南部の上河原に位置し、採集された遺物は10点である。１は土師器の壺形土器の頸部であり、外面には縦方向のヘラ撫で、内面には横撫での調整痕跡が認められる。小破片のため断定はできないが、古墳時代前期の土器と見てよいものと考えられ、弥生時代後期に遡る可能性もある。２は土師器の台付甕形土器の脚部である。端部は平坦面となっており、折り返しが見られないことから、古墳時代前期の単純口縁の台付甕形土器と考えられる。３・４は土師器質の土器片であり、壺形土器の口縁部に近い部位の破片と考えられるが、詳細時期は不明である。５・６・７・８・９も同じく土師質の土器片であり、甕あるいは壺形土器の体部破片と考えられるが、詳細時期は不明である。10は古代以降の土鈴の一部と考えられる。採集された遺物から、臼井阿原上河原遺跡は古墳時代～古代の遺跡と考えられる。

No.３　整理地遺跡

県営清川団地の南側に位置する。採集された遺物は１点である。１は土師器の壺形土器の頸部であり、古墳時代前期の所産時期が比定できるものである。採集された遺物から、整理地遺跡は古墳時代前期の遺跡と考えられる。

No.４　西花輪村北（むらきた）・村間（むらあい）遺跡

西花輪集落内、西村公民館の南側に位置し、採集された遺物は５点である。１は土師質の土器片であり、中世以前の壺あるいは甕形土器の体部と考えられる。２は土師器の杯形土器であり、薄手の器厚と赤色スコリアを含む胎土は平安時代（９～10世紀代）の所産時期に比定できるものと考えられる。３・４は土師質の土器片であり、器表面の剥落が著しく不確定ではあるが、古墳時代以前の壺あるいは甕形土器の体部破片である可能性がある。５は土師器質の土器片であり、器厚や胎土などから壺あるいは甕形土器の体部破片であると考えられるが時期は不明である。採集された遺物から、西花輪村北・村間遺跡は古墳時代～平安時代の遺跡と考えられる。

No.５　延里（えんり）遺跡

藤巻字延里の永正寺の境内周辺に位置し、採集された遺物は２点である。１は土師質の土器片であるが、小破片のため器種・時期は不明である。２は土師質の土器片であり、器厚や胎土などから古墳時代前期の壺あるいは甕形土器の体部破片であると考えられる。採集された遺物から、延里遺跡は古墳時代前期以降の遺跡と考えられる。

No.６　沖村遺跡

今福字村東の宝珠院周辺（通称は沖村）であり、採集された遺物は１点のみである。１は薄手の土師器の小破

片であり、外面に赤色顔料による赤彩が施される。小破片ゆえに不確定ではあるが、弥生時代後期の高杯形土器の杯部に類似する。採集された遺物から、沖村遺跡は弥生時代以降の遺跡と考えられる。

No.7　立川飛行機甲府製造所跡

山之神の字立川ほかに所在する第二次世界大戦末期に設置・運営された軍事工場の跡地である。跡地の大半は現在の流通団地が占めており、地表面で確認される遺構・遺物は認められないが、「戦争遺跡」として捉えられる遺跡である。なお、製造所の施設の範囲は明確には捉えられない部分があり、第３図には空中写真で把握できる範囲を示した。

No.8　冷久保（ひえくぼ）遺跡

山之神集落の八幡宮の南東側に位置し、採集された遺物は５点である。１は瀬戸・美濃系の陶器碗の口縁部破片であり、近世に所産時期を比定できる。２・３は土師質の皿形土器の小破片である。２は口縁端部であり、端部が肥厚する断面形状を呈す。３は底部の破片であり、ごくわずかに回転糸切りの痕跡が認められる。２・３はその形状から見て、中世～近世の「かわらけ」に比定される。４・５は土師質の土器の小片であるが、器種および時期は不明である。採集された遺物から冷久保遺跡は中世～近世の遺跡と考えられる。

No.9　神田（じんでん）遺跡

布施の神田団地の東側に位置し、採集された遺物は２点である。１は内耳土器の口縁部破片と考えられる。口縁端部が面取りされた平坦面を有すことや器厚が比較的薄手である特徴から見て、近世初頭の浅い焙烙形土器であろうと考えられる。２は土師質の皿形土器の小片であり、中世～近世の所産時期が比定される。採集された遺物から神田遺跡は中世～近世の遺跡と考えられる。

No.10　布施村北遺跡

布施の八幡穂見神社の南西に位置し、採集された遺物は２点である。１は土師質の皿形土器の底部であり、中世の「かわらけ」に比定される。２は中世～近世の内耳土器の小破片であり、特に外面側に顕著に砂粒が付着する点は底部の特徴を有しているものと考えられる。採集された遺物から布施村北遺跡は中世の遺跡と考えられる。

No.11　小井川遺跡

布施字小井川の妙泉寺の北側に位置し、採集された12点である。１・２は土師質の皿形土器の口縁部である。口径さえも復元できないほどの小破片であるが、断面形状や胎土質は中世の「かわらけ」に類似する。3・4・5はいずれも土師器質の土器片であるが器種・時期は不明である。ただし、５については、薄手であり緻密な胎土であることなどから１・２同様に「中世かわらけ」である可能性がある。６は飴釉の掛かる瀬戸・美濃系の陶器である。体部が直立し、口縁端部が内側へ突出する器形は筒状の香炉形土器に類しており、16世紀代（大窯Ⅰ～Ⅲ）におおむね該当する時期の所産であろうと考えられる。７は織部風の緑色の濃い灰釉の掛かる美濃系の陶器である。二重になる厚い口縁部は折り返しにより成形されており、口径は40cmを超える。大型の製品であり、手水鉢のような器形であろうと考えられる。時期は不確定であるが、近世以降と考えられる。８は外面のみに緑灰色の灰釉が掛けられた陶器の壺形土器の底部であり、高台は削り出しにより成形されており、畳付部分のみが釉剥ぎされている。時期および産地は不明である。９は陶器の擂鉢の底部～体部の破片である。器表には鉄釉が掛けられ、擂り目は櫛歯状工具で施され、内面のほぼ全面に入れられたものであると考えられる。よって時期的には近世以降の所産に比定されると考えられる。10は鉄釉の掛けられた陶器であり、小片のため不明確であるが、壺あるいは徳利形土器の体部と考えられる。産地・時期は不明である。11は型紙摺りの単色呉須絵が施された磁器の口縁部であり、近代以降の所産時期が考えられる。採集された遺物から小井川遺跡は中世～近世の遺跡と考えられる。

No.12　古寺家（ふるじけ）遺跡

布施字古寺家に位置し、採集された遺物は１点である。１は堅緻に焼き締められた陶器であるが、常滑焼などのように器壁内面まで堅緻に仕上がってはおらず、陶器と土器の中間的な質をもつものである。器形は大型の甕形土器であると考えられるが、中世以降の所産時期に比定できると考えられるものである。採集された遺物から古寺家遺跡は中世以降の遺跡と考えられる。

No.13　三井右近丞屋敷跡（みついうこんのじょう）

山之神字居村に位置し、採集された遺物は２点である。１は肥前系の磁器であり、２同様に高台の付く皿の底部破片である。内面は見込み部周縁には花唐草を表現した連続文様が呉須で施され、中心部にコンニャク印判（あるいは手描きである可能性もある）五弁花が入る。底部は全面に釉が施されており、高台の内側に一条の円圏線が巡り、中心部には二重の方形枠線で囲まれた草書体の福字銘である「渦福」が入る。また、底部には窯詰め時の「針支え」の胎土目が少なくとも３点認められる。呉須絵の発色状況・文様構成・銘・窯詰め技法の特色などから判断して、18世紀前半代の所産時期が比定できるものと考えられる。２は肥前系の磁器であり、高台の付く皿の底部の小破片である。内面には筆書きで草花文と見られる文様が呉須で施される。底部（裏面）の高台内側には釉剥ぎされて無釉となる部分があることから、おそらく蛇の目高台であろうと考えられ、18世紀後半から19世紀前半代の所産時期に比定できるものと考えられる。

No.14　西花輪村東遺跡

西花輪字村前の竜光院の東側に位置し、採集された遺物は５点である。１・２は土師器質の粗い胎土の土器片であり、部位は不明だが近世の焙烙の一部である可能性がある。３は肥前系の磁器であり、外面に呉須で円文が施された小型の碗の体部と考えられる。また、３の割れ口には鉱物質の付着物が認められ、補修技法の「鉛焼継ぎ」の痕跡と考えられ、18世紀後半～19世紀代の所産時期に比定めされるものと考えられる。４は肥前系の磁器の小型の碗の底部であり、内面には退化したものとみられる五弁花が入り、外面の高台外側には二条の円圏線が巡る。18世紀後半～19世紀前半代の所産時期に比定されるものと考えられる。５は型紙摺りあるいはプリント印判による呉須絵が施される磁器である。おそらく碗と見られる破片であり、近代以降の所産時期に比定される。採集された遺物から西花輪村東遺跡は江戸時代の遺跡と考えられる。

No.15　今福村東遺跡

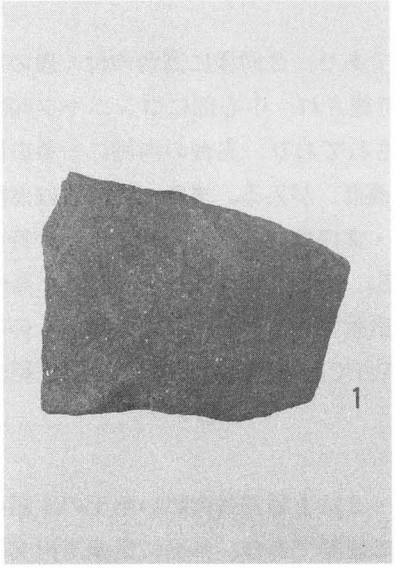
今福字村東の海禅寺周辺に位置し、採集された遺物は２点である。１は土師器質の土器片であるが、器種・時期は不明である。２は土師器質の土器片であり、器壁の厚い大型品の体部破片である。内面は横方向の撫でで調整されており、外面には生乾き状態の段階で布などによって連続する軽い叩きを行い施したと考えられる鱗状の調整痕が認められる。器種は不明であるが、火鉢等の大型品であることが想定される。なお、時期は不確定的であるが、近世以降の所産と考えられる。採集された遺物から今福村東遺跡は近世以降の遺跡と考えられる。

No.16　中道下遺跡

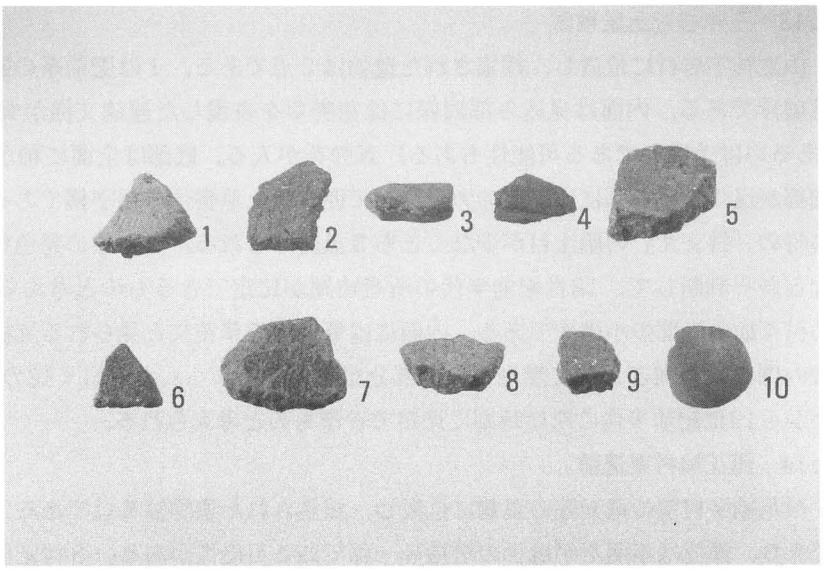
今福集落の妙法寺周辺に位置し、採集された遺物は４点である。１は土師器質の土器片であるが、器種・時期は不明である。２・３は土師器質の土器片であり、器厚や胎土などから壺あるいは甕形土器の体部破片であると考えられるが時期は不明である。４は器厚や胎土などから、近世の焙烙の口縁部の破片であると考えられる。採集された遺物から見て村前遺跡は近世以降の遺跡と考えられる。

No.	遺跡名称	所在地	遺跡時期							備考（分布調査地点名称）
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近現代	
1	上手新田遺跡	山之神			●					分布調査(1)区ーA遺跡
2	臼井阿原上河原遺跡	臼井河原			●	●				分布調査(5)区ーC遺跡
3	整理地遺跡	東花輪			●					分布調査(9)区ーA遺跡
4	西花輪村北・村間遺跡	西花輪			●	●				分布調査(12)区ーA遺跡
5	延里遺跡	藤巻			●					分布調査(13)区ーAB遺跡
6	沖村遺跡	今福		●						分布調査(14)区ーA遺跡
7	立川飛行機甲府製造所跡	山之神							●	ー
8	冷久保遺跡	布施					●	●		分布調査(2)区ーA遺跡
9	神田遺跡	布施					●	●		分布調査(3)区ーA遺跡
10	布施村北遺跡	布施					●			分布調査(3)区ーB遺跡
11	小井川遺跡	布施					●	●		分布調査(5)区ーF遺跡
12	古寺家遺跡	布施						●		分布調査(7)区ーA遺跡
13	三井右近丞屋敷跡	布施					●	●		ー
14	西花輪村東遺跡	西花輪						●		分布調査(11)区ーB遺跡
15	今福村東遺跡	今福						●		分布調査(13)区ーCD遺跡
16	中道下遺跡	今福						●		分布調査(14)区ーB遺跡

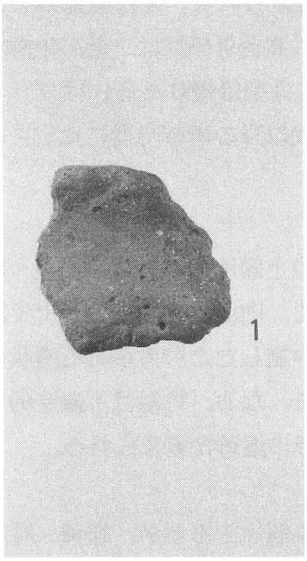
第１表　田富町遺跡詳細分布調査確認遺跡および遺物散布地一覧



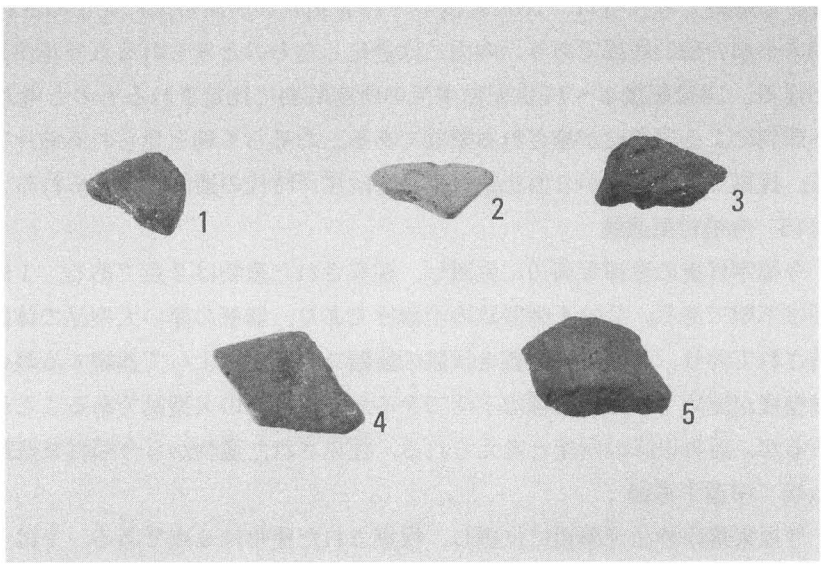
No. 1　上手新田遺跡



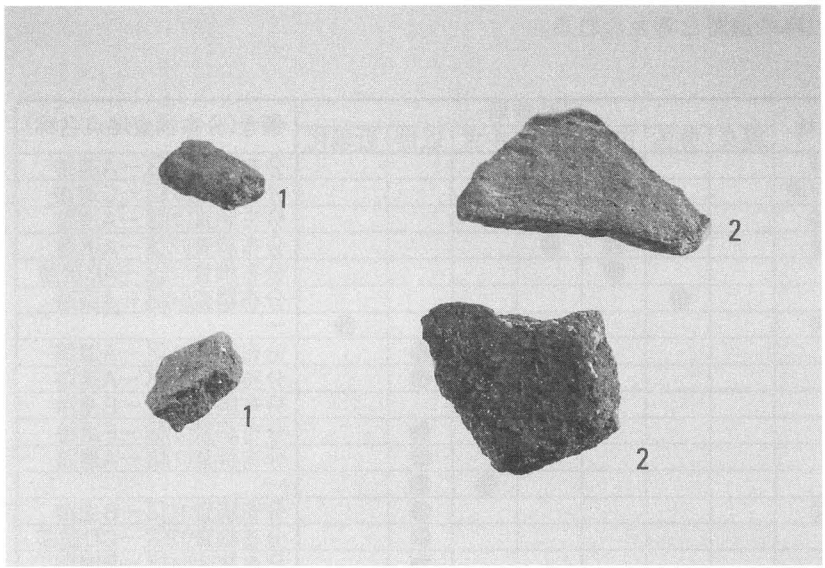
No. 2　臼井阿原上河原遺跡



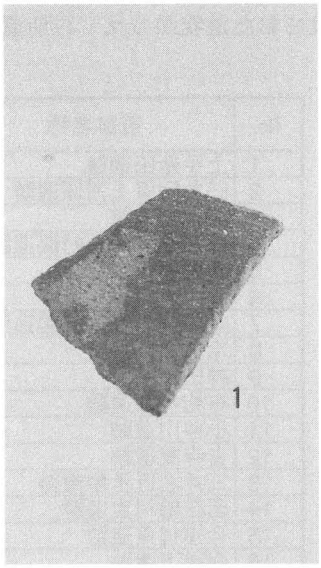
No. 3　整理地遺跡



No. 4　西花輪村北・村間遺跡

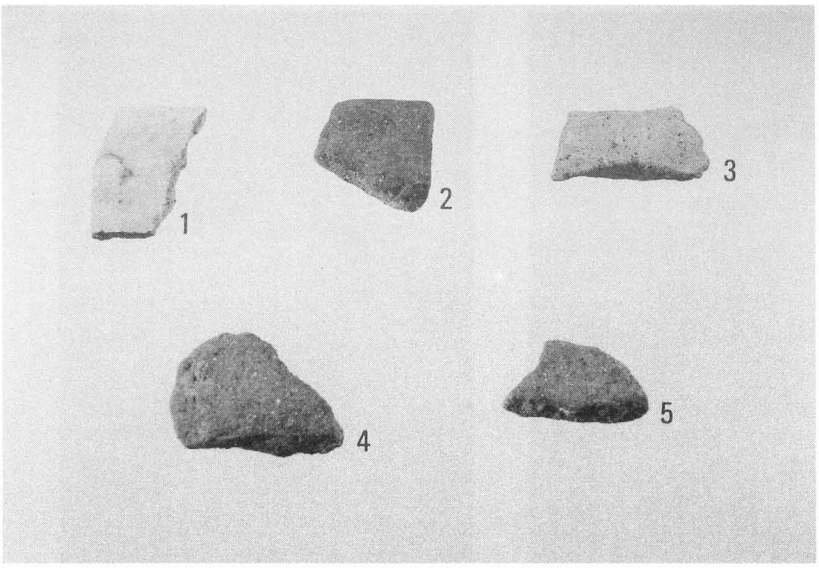


（上段）No. 5　延里遺跡　　（下段）No.15　今福村東遺跡

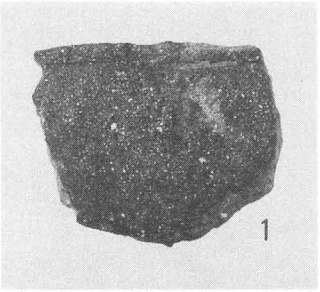


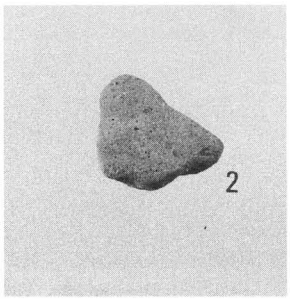
No. 6　沖村遺跡

写真２　確認された遺物(1)

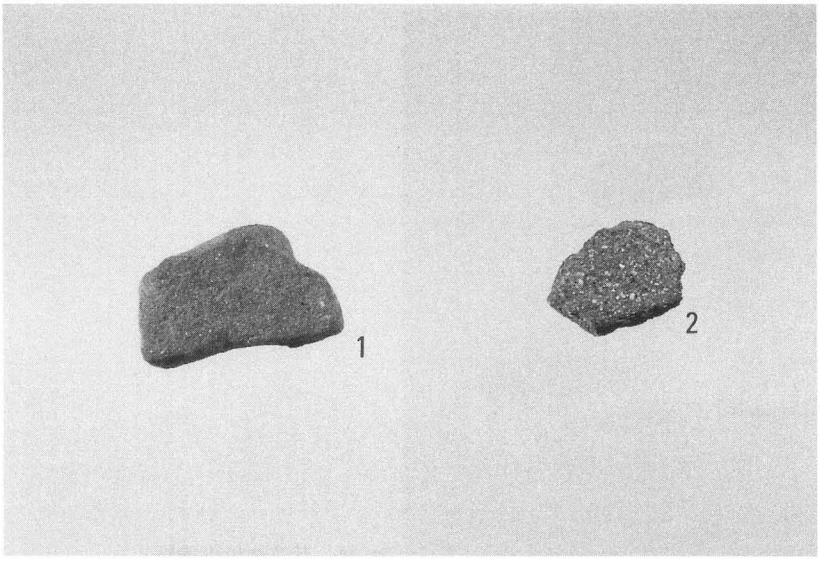


No. 8　冷久保遺跡

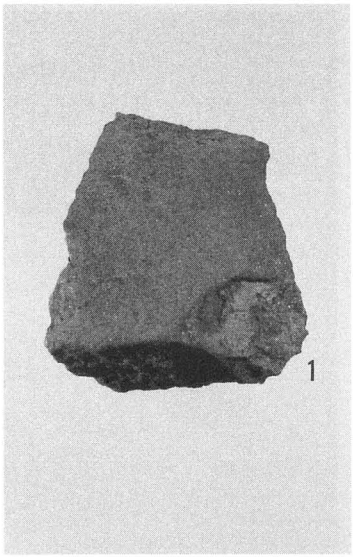




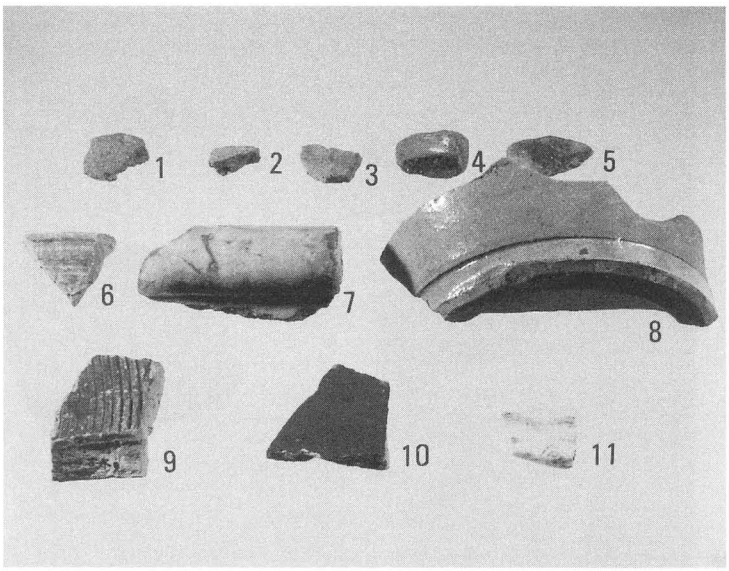
No. 9　神田遺跡



No.10　布施村北遺跡

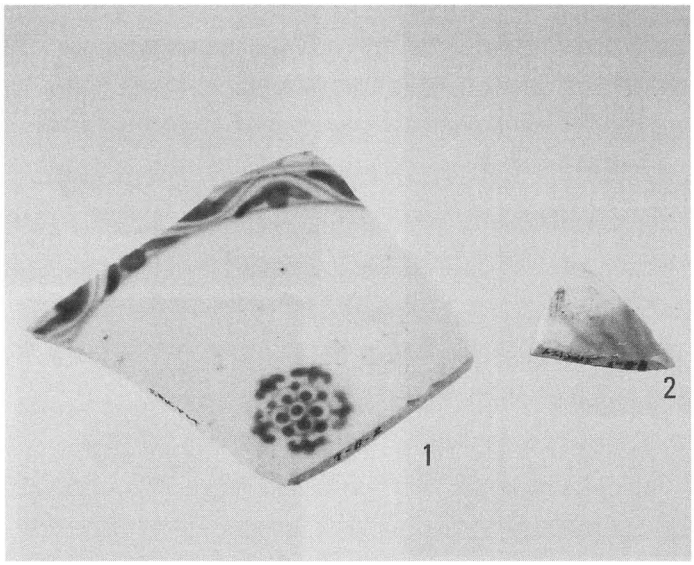


No.12　古寺家遺跡

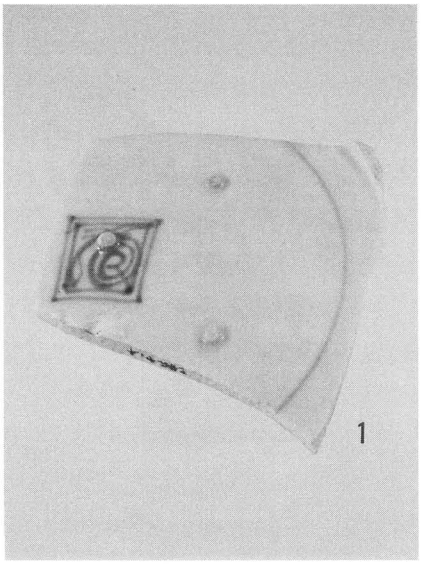


No.11　小井川遺跡

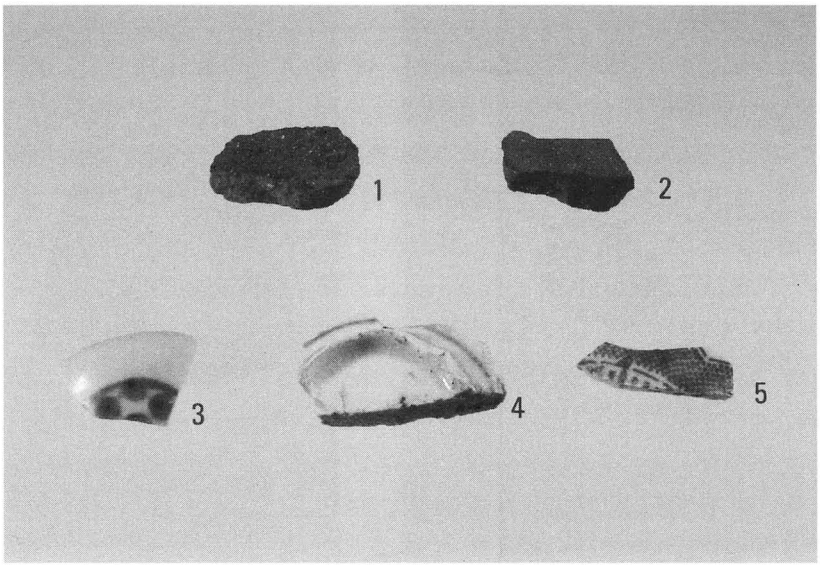
写真３　確認された遺物(2)



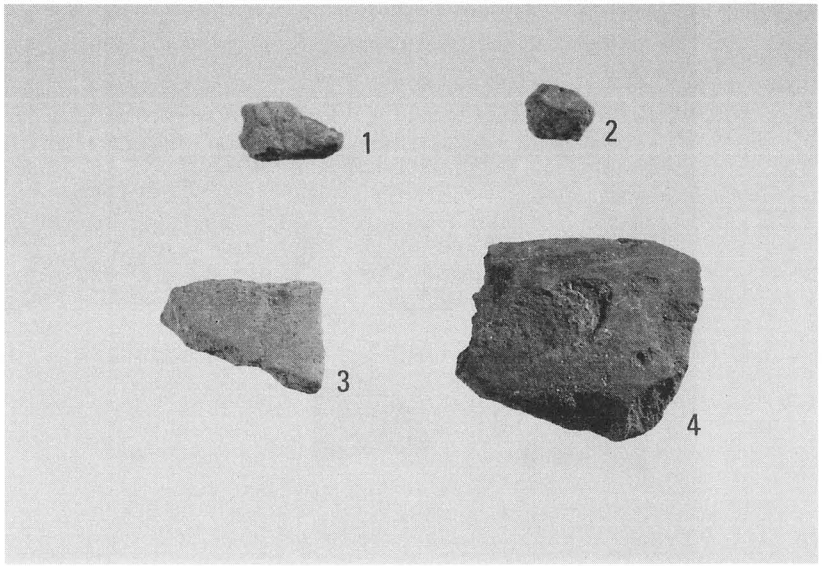
No.13　三井右近丞屋敷跡



No.13－1の裏面



No.14　西花輪村東遺跡



No.16　中道下遺跡

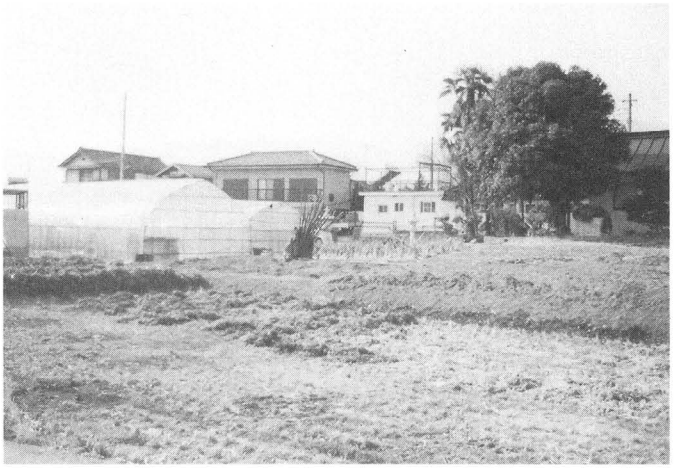
写真４　確認された遺物(3)

No. 1　上手新田遺跡

No. 2　臼井阿原上河原遺跡

No. 3　整理地遺跡

No. 4　西花輪村北・村間遺跡



No. 6　沖村遺跡

No. 5　延里遺跡

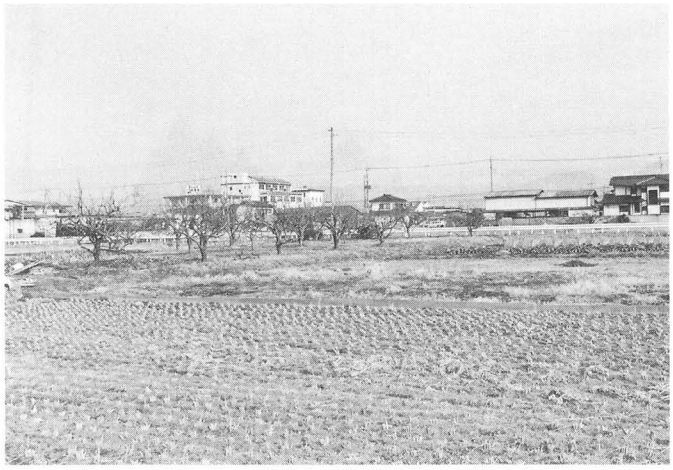
写真５　確認された遺跡(1)

No. 8　冷久保遺跡

No. 9　神田遺跡

No.10　布施村北遺跡

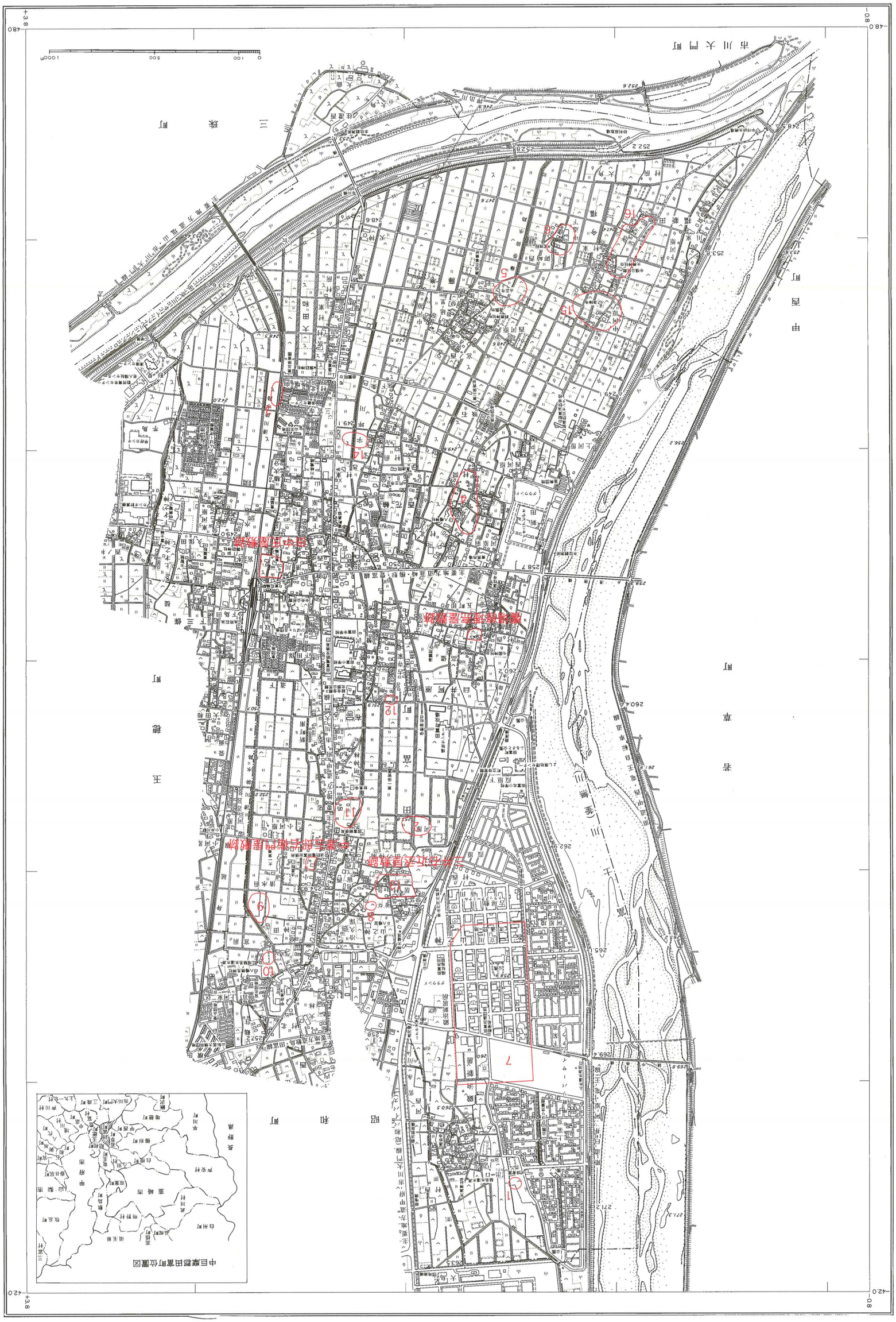
No.11　小井川遺跡



No.14　西花輪村東遺跡

No.15　今福村東遺跡

写真６　確認された遺跡(2)



第3図　田富町遺跡分布図

第２節　試掘調査の成果

試掘調査の目的と方法

田富町は釜無川に近く、その堆積物が厚く堆積していると予想されるので、遺跡が地中深くに埋没している可能性がある。そこで、実際に地面を掘削し地下の状況を把握することで遺跡の有無や性格についての考察の材料とするために試掘調査を実施した。

試掘坑の設定条件は、①町内の広い範囲に設定し町内全体の様子が把握できること、②地形分類を行い旧河道の可能性がある低地中央部は避け、遺跡の立地や水田などの生産域が期待される微高地から低地にかかる部分をねらって設定した。試掘調査は小型重機により1.5×1.5mの試掘坑を湧水があるまで掘削し、深さは１～２mであった。

調査内容は、①土層断面の観察・記録、②土壌サンプルの採取である。土壌サンプルは、①プラント・オパール分析によって水田面の有無や地表環境の推定、②花粉分析によって周辺の植生とその編年的位置付けによる堆積層の時期推定、③珪藻分析により陸化の有無や堆積環境の推定を目的とした。土壌サンプルは黒灰色シルト層を対象とし４ヵ所４点である（No.３の６層上面、No.４の５層中部、No.５の６層中部、No.８の６層上面）。また、土層の年代を推定するため出土した木材を炭素14年代測定を実施した。試掘資料について３点（No.３の６層下部、No.５の４層下部、No.８の８層中）、さらに既存のボーリングデータについて１点（町立南小学校No.１地点の腐植土中）の計４点を実施した。これらの分析はパレオ・ラボに委託して実施した（詳細は第６節）。土層断面の観察、遺構・遺物の有無の確認、土壌サンプルや炭素14年代測定用木材の採取等を実施した。

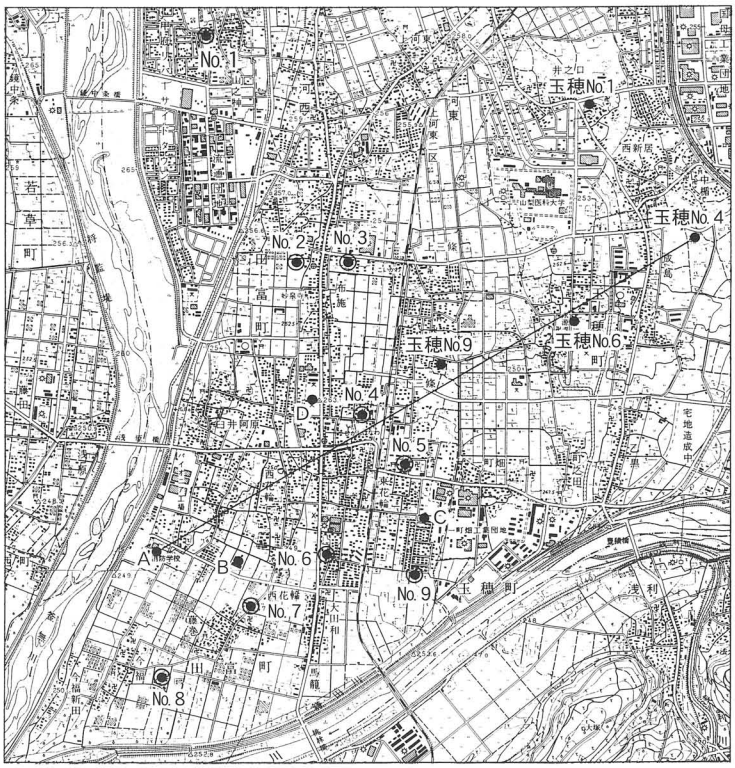
調査坑は９ヵ所設定した（第４図）。

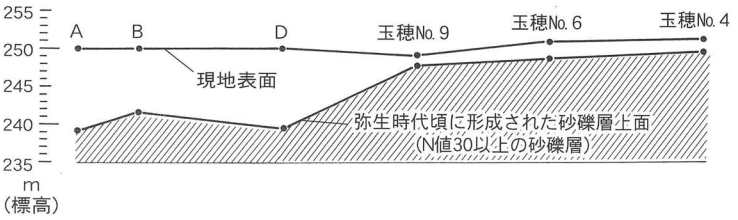
試掘坑設定地点は次のとおり。No.１が山之神字出口960の畑。No.２が布施字宿西3219の畑。No.３が布施字小河原423－22の宅地。No.４が布施字下田保1247－4の田。No.５が布施字宮本729－1の田。No.６が西花輪字村東261－7の雑種地。No.７が西花輪字村前1077－１の田。No.８が今福字御崎西250－1の宝珠院境内地。No.９が東花輪字整理地1307－1の畑。

このうち、No.１～８については2001年12月15・16日の両日実施した。No.９については2002年２月20日に実施した。この地点では踏査の折りに縄文土器が採集されたため、その由来を検討するために実施した。

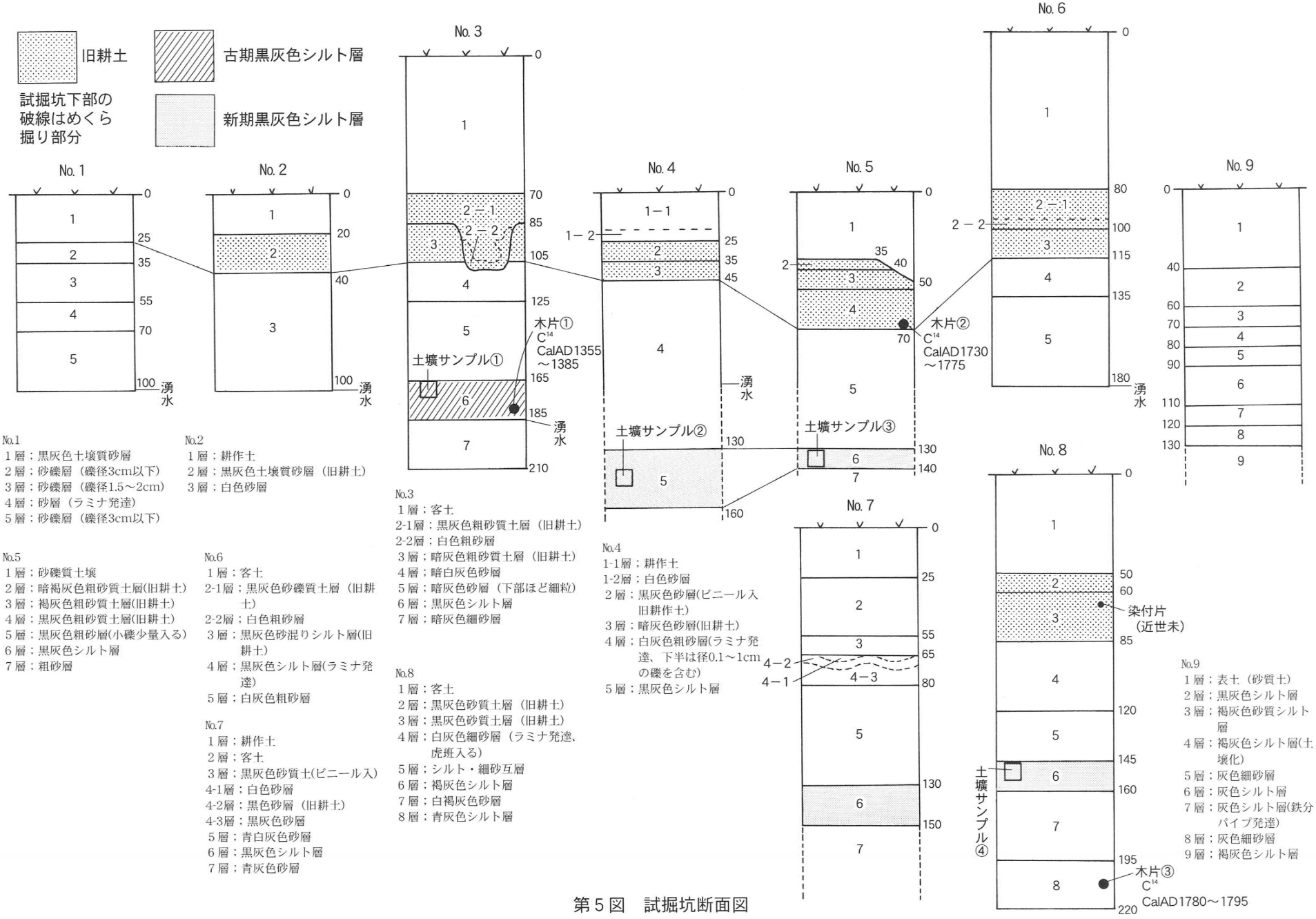
試掘調査の結果

第５図に断面図を示した。湧水があるまで深いところで220cm（No.８）、浅いところでは100cm（No.１・２）であった。No.１・６・





第４図　試掘坑設定地点と既存データの位置(1/50,000)および地下断面推定図(平面方向1/50,000、水平方向1/1,000)



No.1
1層；黒灰色土壌質砂層
2層；砂礫層（礫径3cm以下）
3層；砂礫層（礫径1.5～2cm）
4層；砂層（ラミナ発達）
5層；砂礫層（礫径3cm以下）

No.2
1層；耕作土
2層；黒灰色土壌質砂層（旧耕土）
3層；白色砂層

No.3
1層；客土
2-1層；黒灰色粗砂質土層（旧耕土）
2-2層；白色粗砂層
3層；暗灰色粗砂質土層（旧耕土）
4層；暗白灰色砂層
5層；暗灰色砂層（下部ほど細粒）
6層；黒灰色シルト層
7層；暗灰色細砂層

No.4
1-1層；耕作土
1-2層；白色砂層
2層；黒灰色砂層(ビニール入旧耕作土)
3層；暗灰色砂層(旧耕土)
4層；白灰色粗砂層(ラミナ発達、下半は径0.1～1cmの礫を含む)
5層；黒灰色シルト層

No.5
1層；砂礫質土壌
2層；暗褐灰色粗砂質土層(旧耕土)
3層；褐灰色粗砂質土層(旧耕土)
4層；黒灰色粗砂質土層(旧耕土)
5層；黒灰色粗砂層(小礫少量入る)
6層；黒灰色シルト層
7層；粗砂層

No.6
1層；客土
2-1層；黒灰色砂礫質土層（旧耕土）
2-2層；白色粗砂層
3層；黒灰色砂混りシルト層(旧耕土)
4層；黒灰色シルト層(ラミナ発達)
5層；白灰色粗砂層

No.7
1層；耕作土
2層；客土
3層；黒灰色砂質土(ビニール入)
4-1層；白色砂層
4-2層；黒色砂層（旧耕土）
4-3層；黒灰色砂層
5層；青白灰色砂層
6層；黒灰色シルト層
7層；青灰色砂層

No.8
1層；客土
2層；黒灰色砂質土層（旧耕土）
3層；黒灰色砂質土層（旧耕土）
4層；白灰色細砂層（ラミナ発達、虎斑入る）
5層；シルト・細砂互層
6層；褐灰色シルト層
7層；白褐灰色砂層
8層；青灰色シルト層

No.9
1層；表土（砂質土）
2層；黒灰色シルト層
3層；褐灰色砂質シルト層
4層；褐灰色シルト層(土壌化)
5層；灰色細砂層
6層；灰色シルト層
7層；灰色シルト層(鉄分パイプ発達)
8層；灰色細砂層
9層；褐灰色シルト層

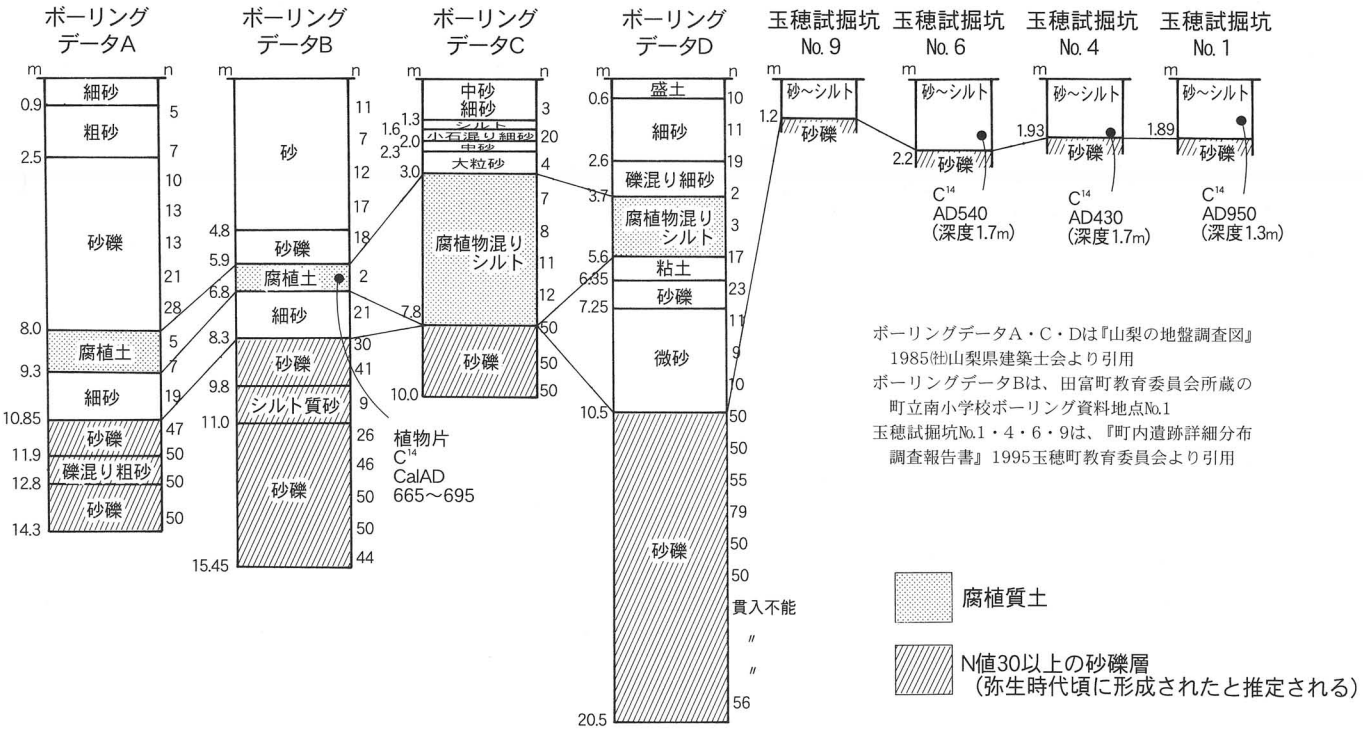
第5図　試掘坑断面図

７・８では50～80cmの客土がなされていた。表土の直下には旧耕作土と思われる土壌質の砂層が、厚さ20～35cmでみられた。No.５で旧耕作土の下底から得られた木材を炭素14年代測定を行ったところ暦年代に較正した年代で18世紀中頃であった。近世後半までに形成された土層と推定される。その下には白色や灰色、黒灰色などの砂層が50～85cmの厚さであり、ラミナが発達するものがあり自然の流水が形成した層であることが明らかである。

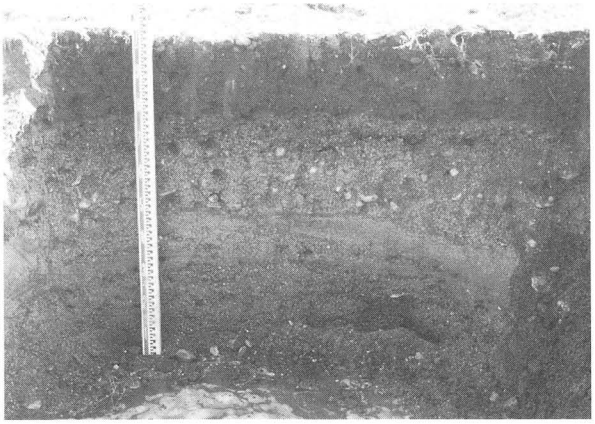
その下層に黒灰色シルト層が10～30cmの厚さで観察された。No.４・５では砂層掘削時に湧水したがさらに下をめくら掘りしたところおおむね土層図のような深さで黒灰色シルト層を確認した。この土層は陸地化し耕作土化している可能性があるので、No.３・４・５・８でその層の土壌サンプルを採取した。No.３・８では断面からその層の上面を採取、No.４・５ではめくら掘り時に重機が上げた土層から採取した。また、No.３では黒灰色シルト層下部出土の木材を炭素14年代測定を行なったところ、暦年代に較正した年代で14世紀第３四半期頃であった。No.４・５の黒灰色シルト層からは花粉分析の結果、アカマツやクロマツなどのニヨウマツ類が優占しており、近世以降の特徴を示す。No.４・５とNo.３の黒灰色シルト層は形成時期を異にする。

ところで、No.８では６層の褐灰色シルト層の下に７層の砂層がありさらにその下位から８層青灰色シルト層がみられた。その８層中に多量の木材が入っていたので炭素14年代測定を実施したところ、暦年代に較正した年代で18世紀第４四半期頃と最も新しい年代を得た。６層をNo.３～５の黒灰色シルト層に比定すると年代的に矛盾することになる。No.８は試掘地域の中で最も下流にあるので堆積物が特に厚い可能性がある。そこで、直近のNo.７とNo.４・５も加えて、この黒灰色シルトないし褐灰色シルト層は近世後半頃までに形成された新しいシルト層（新期黒灰色シルト層）として把握し、No.３にみられた黒灰色シルト層（古期黒灰色シルト層）と区別することとする。

なお、No.１では堆積物に小礫を多く含む砂礫層が主体であり、他の試掘地点と様相を異にしていた。試掘地点は昭和のかすみ堤よりも釜無川よりにあり、旧河道であったことに由来すると思われる。また、No.９では結局縄文土器の包含層は確認されなかった。道ぎわの電柱の埋め土として入れられた土壌の中に土器が入っており、そ

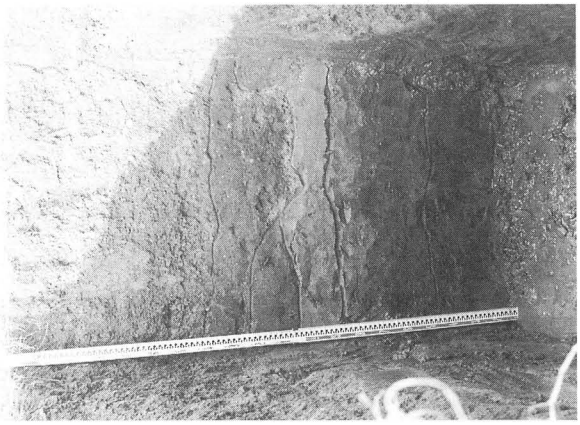


第６図　田富町内のボーリングデータおよび玉穂町試掘データ

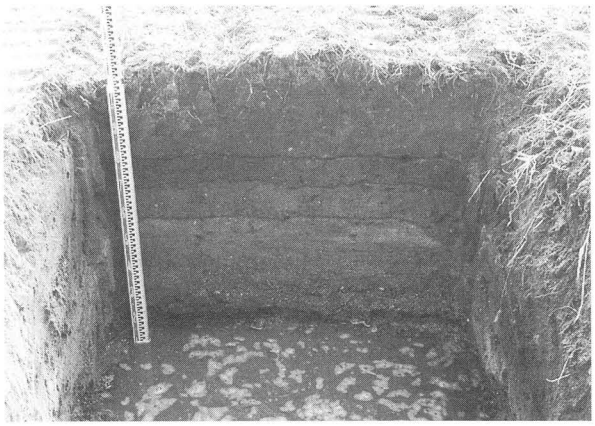


試掘坑No. 1

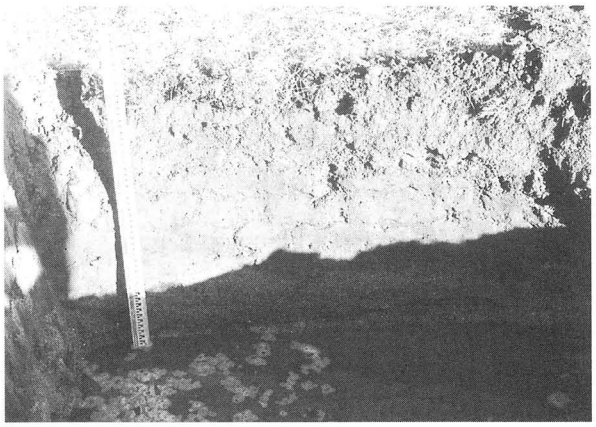
試掘坑No. 2



試掘坑No. 3 （左が上）



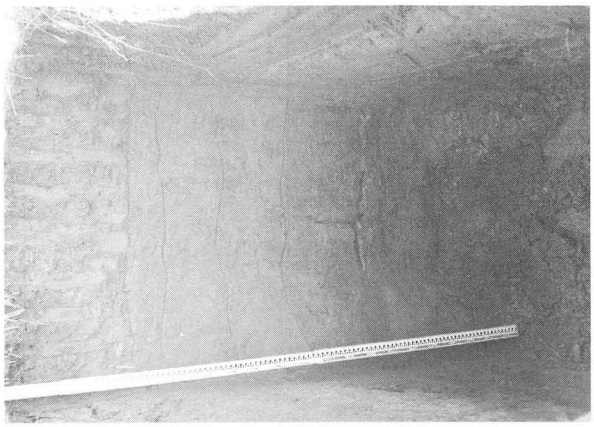
試掘坑No. 4



試掘坑No. 5

試掘坑No. 6

試掘坑No. 7



試掘坑No. 8 （左が上）

写真７　試掘坑土層断面

の土層は台地上にみかける黒色土で、試掘で観察されたシルトや砂ではなかった。町外から持ち込まれた客土であった。この地点の土層は、これまでの試掘坑の中で最も細粒な砂からシルトの土層である。

また、№.1のすべての土層、№.5の5層について帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏に岩石鉱物学的視点で観察いただいたところ、肉眼で花崗岩が観察され釜無川の影響の強い堆積物であるとの教示を得た。

ボリングデータなどの既存資料との比較

試掘調査とは別に、町内でのボーリングデータを探したところ、教育委員会所蔵の町立南小学校建設時のボーリングサンプルを得ることができた（第6図）。深さ15mほどのサンプルが3本あり、その内の№.1に注目した。木箱の中にサンプルケースに入った土層が15本あり、その中に腐植土があって炭素14年代測定が可能な資料が入っていた。腐植土は地表下6.15～6.45mの地点のサンプルで、測定結果は暦年代に較正した年代で7世紀後半頃であった。

そこで、『山梨の地盤調査図』[(1)]から田富町内のボーリングデータをあたったところ、おおむね近似する断面を示していた（第6図）。深さ3～9mの範囲内に腐植土層があり、その下位でN値が30以上と硬い砂礫層の厚い堆積があった。おおむね、この腐植土層が連続する層を形成していたと考えられる。

さらに、隣町の玉穂町で実施された試掘調査の成果では、炭素14年代（暦年代に較正されていない年代で）が得られており、A．D．430・540・950という今回得られた年代と近似するものが硬い砂礫層の直上で得られていた[(2)]。また、『山梨の地盤調査図』の検討から、N値30以上の砂礫層は深さ2～3mほどの浅いところで出現している状況が把握され、試掘の結果と整合的であった。そして、その砂礫層が外山秀一氏などが指摘する弥生時代前期末から中期初頭の大規模な洪水[(3)]の時に形成されたと推定された。

今回の田富町内の試掘成果や、既存のボーリングデータの検討結果は、玉穂町で指摘された成果と整合的である。その状況を第4図下に示した（A・B・玉穂№.4・6・9はそのままのデータで、Dのみ表面の標高を250mに換算して投影している）。基盤となる弥生時代の砂礫層の上面は田富町内で深く、玉穂町内では浅い。この図は現在の標高で250mのラインに添った地形の断面ラインであるが、両町の境付近で8mも急激に落ち込んでおり、崖線の存在が推定される。南小学校のボーリングデータBで7世紀の土層を確認しており、この崖線は釜無川が弥生時代から古墳時代までに形成したものと推定される（このボーリングデータを帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏に観察していただいたところ、すべてのサンプルに花崗岩が見られ釜無川の影響を強く受けた堆積物とのご教示を得た）。

田富町内ではその崖線下の低い地形が除々に埋積され、現在では玉穂町域よりもやや高い地形面を形成するに至っている（第2章）。釜無川の流路については、中世には竜王町から甲府市方面に流れていたことが推定されており、上記が事実とすると中世以前の少なくとも弥生時代から古墳時代にかけてのある時期に現釜無川流路と同様な流れがあった可能性がある。

註

(1) ㈳山梨県建築士会1985『山梨の地盤調査図』

(2) 玉穂町教育委員会1995『町内遺跡詳細分布調査報告書』

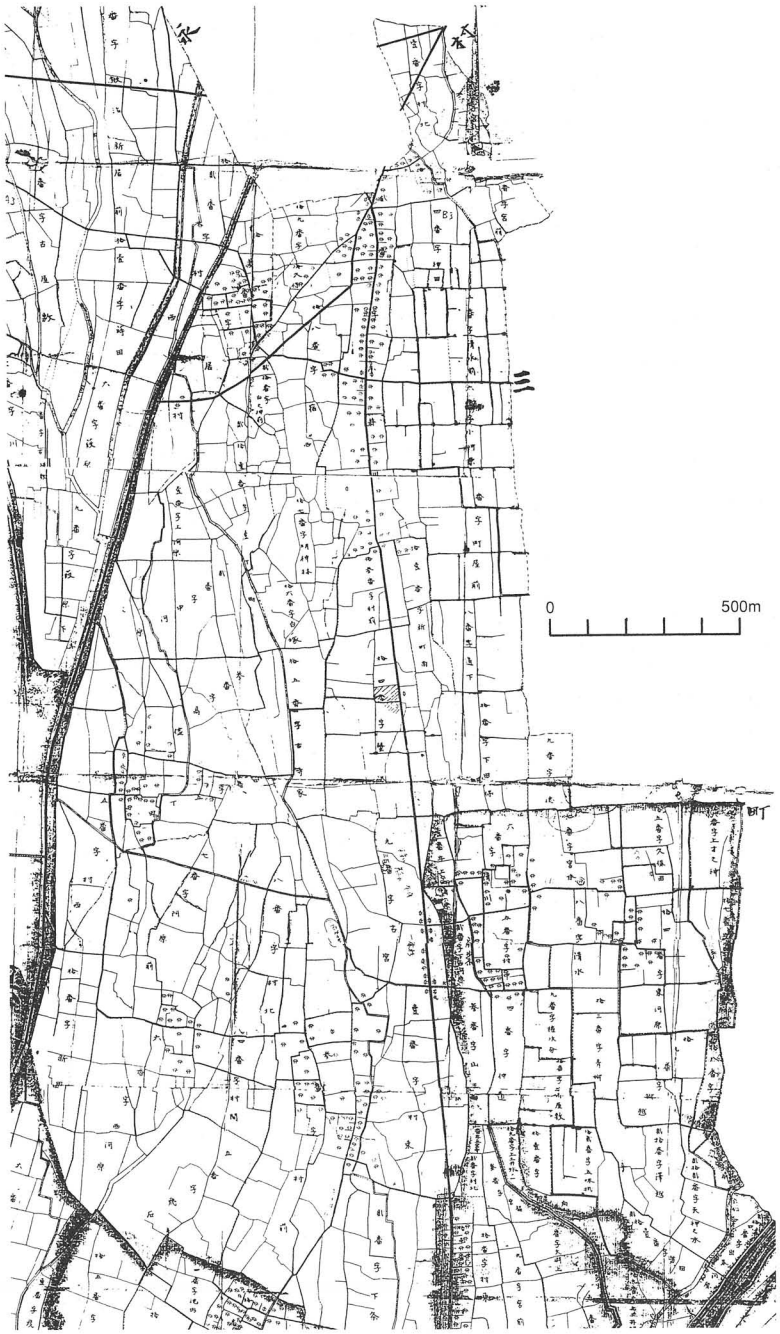
(3) 外山秀一1994「プラントオパールからみた稲作農耕の開始と土地条件の変化」『第四紀研究』第33巻第5号

第３節　条里型地割と条里推定地域の設定

田富町内にはかねてから条里型地割の存在が指摘されていた（第８図上）。須藤賢氏と谷岡武雄氏は条里型地割の縦線が約６°東偏するものが巨摩郡下にみられ、田富町域の条里型地割をこれに含めている。[(1)] また、高木勇夫氏は釜無川扇状地端部の湧水線直下に条里型地割が存在していることを示し、田富町域の条里型地割を図示している。[(2)]

今回、明治28年の地図（第７図、『山梨県中巨摩郡小井川村・花輪村・忍村全図』田富町所蔵）を検討し、条里型地割と思われる①一辺109mの方形区画線、②その区画線と同一方位を持つ直線的な地割線とを地図上に落としてみた。①の区画については小井川から東花輪の各所に散見される。②については町域中央部を広く覆っている。この地域を条里推定地域とした（第８図）。

試掘調査の成果から、田富町内の地形は古墳時代以降数mもの厚い河川堆積物の存在が知られたので、表層の条里型地割が古代に設定されたそのままではないことは明らかである。しかし、小井川の地名は「安楽寺院等庄園録案」に安元２年（1176）に小井河荘として現われ、布施についても元永２年（1119）に「中右記」に布施荘として現われる。[(3)] 平安末には田富町内の地名が文献に初出しており、条里型地割や遺跡の存在は十分推定される状況である。条里型地割も洪水砂に埋まるたびに復原されてきたことが考えられ、今後地表下数mの地下から良好な遺跡が発見されることは確実であろう。



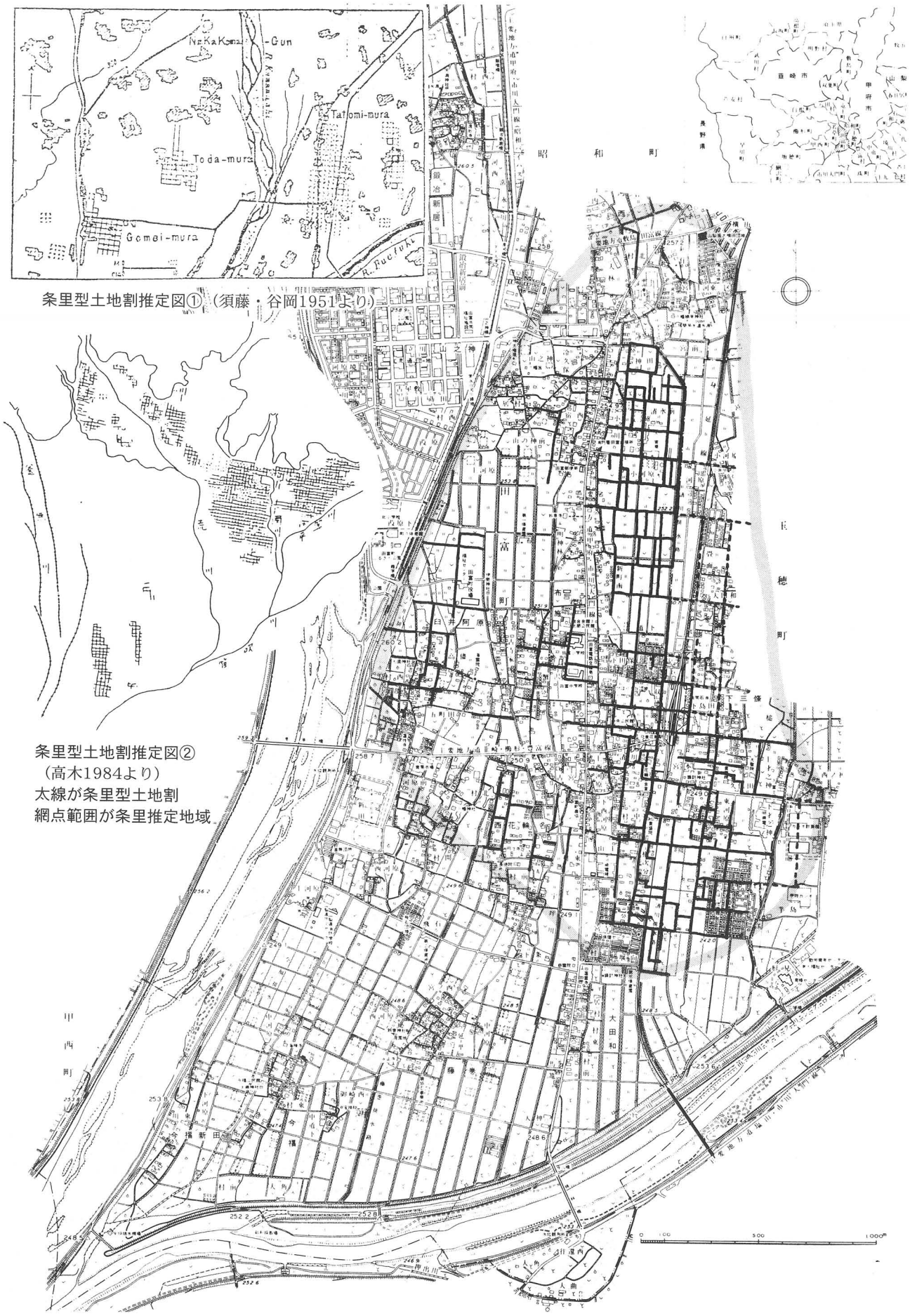
第７図　明治28年の地図（部分）

註

(1)　須藤賢・谷岡武雄1951「甲斐條里の諸問題」『地理学評論』第24巻４号

(2)　高木勇夫1984「沖積低地の地形配列・微地形と条里型地割―特に内陸盆地を例として―」『条里制の諸問題Ⅲ』奈良国立文化財研究所

(3)　平凡社1995『山梨県の地名』


Tatomi-mura
Toda-mura
Gomai-mura
条里型土地割推定図①（須藤・谷岡1951より）
条里型土地割推定図②
（高木1984より）
太線が条里型土地割
網点範囲が条里推定地域
昭和町
玉穂町
甲西町
大田和
0
100
500
1000m

第８図　条里地域推定図

第４節　城館跡の調査

本町における城館跡は立地環境からそれぞれの地域に割拠していた在地土豪屋敷に限られているが、数が多く、「一村一屋敷」のような遺存状況を呈している。

分布状況は、以下のとおりである。

『甲斐国志』にみる在地土豪について

江戸後期の文化11年（1814）に編纂された甲斐国を代表する地誌である『甲斐国志』に、主にどのような在地土豪層が書き留められているかみてみよう。

①穂坂小次郎光重（旧布施村）

文安６年の棟札あり。明暦中に妙泉寺開創。

②三井右近丞（旧山之神村）

天正８年12月21日付け武田氏印判状他あり（『山梨県史』資料編４ 中世１ 県内文書（以下「県史」という）1325～1333号文書）。

同年３月９日付け穴山信君書状では「河防ノ事」を命ぜられる。河西五郎右衛門、窪田兵部右衛門と連名（県史1329号文書）。甥次郎三郎は天正壬午起請文に「曽根下野衆」とある。

③小池監物（旧臼井阿原村）

天正４年付け武田氏印判状他あり（県史1317～1319号文書）。天正壬午起請文に「城織部組」とある。もとは「津金衆」。

④饗場修理亮（旧臼井阿原村）

天正壬午12月５日付け徳川氏印判状あり（県史1316号文書）。

慶長検地帳に「修理屋敷」とみえる。天正壬午起請文に饗場氏もみえる。「原隼人衆」「直参衆」。

⑤藤巻氏（旧藤巻村）

天正壬午起請文では藤巻孫八郎は「遠山衆」。「築防ノ役人」に藤巻又兵衛がみえる。

⑥花輪又三郎

天正壬午起請文に「山県衆」とある。『一蓮寺過去帳』の応永中にも名がみえる。

⑦鮎川次郎左衛門（旧西花輪村）

天正10年12月７日付け徳川氏印判状あり（県史1324号文書）。

⑧田中弥三左衛門（旧東花輪村）

元亀２年５月17日付け武田氏印判状あり（県史1321号文書）。「九一色衆」。子孫は樋泉氏と改める。

⑨今福氏（旧今福村）

今福浄閑他多出。

『中巨摩郡志』などにみえる在地土豪

『甲斐国志』には見えないが、他の『中巨摩郡志』などに記述が見える主なものは、次の土豪である。

中澤五郎右衛門（旧布施村）

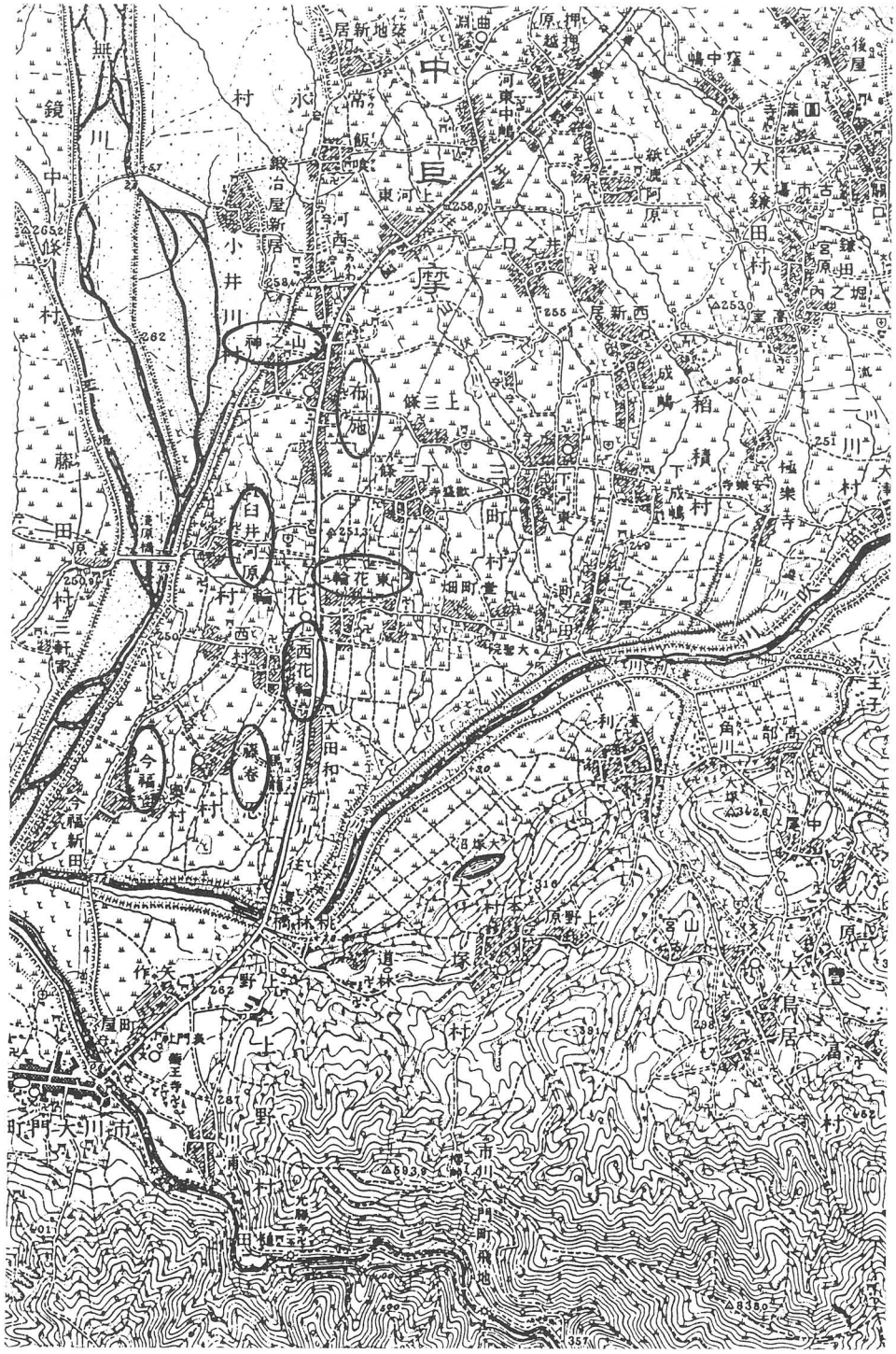
武田浪人。

在地土豪の分布調査の成果

今回の埋蔵文化財の分布調査とあわせて実施した城館跡の調査において、以下の屋敷地が確認された。

三井右近丞屋敷跡　山之神に所在していた中世土豪の一

写真８　三井右近丞屋敷跡



第９図　『甲斐国志』等にみられる在地土豪層の本拠（○印）

員の三井氏の屋敷跡と推定される。字居村地内に東西約150m、南北約100mほどの規模をもち、かつては周囲に土塁と水路が取り巻いていたという。屋敷地の北側には現在でも幅約２m、長さ約20mほどの低い土塁状の高まりが残り、往時の面影をみることができる。現在、三井家の宅地となっている。

饗場修理亮屋敷跡　臼井阿原に所在している。天正壬午起請文にみえる饗場氏の屋敷跡推定地である。現在は饗場保正氏、一昭氏、正隆氏らの宅地になっている。北側から水路がのび宅地の北側で東西に分流し、宅地を取り囲むように流れている。水路から屋敷地を推定すると、方形を呈したおよそ50m四方の規模になる。かつては、周辺の耕作地なども屋敷地内であり、北門・東門なども存在していたという。屋敷地東側には帯状に低い地割がみられ、堀跡の可能性を残している。保正氏宅はかつて「修理屋敷」と呼ばれていたという。屋敷

地の北西には饗場家墓所がある。

中澤五郎右衛門屋敷跡　布施字小井川に所在している。現在、中澤敦子氏の邸宅となっている。屋敷地の北側にはそれほど高くはないが、７～10mほどの幅の広い土塁状の施設をもち、南側にも幅の狭い土塁が存在している。屋敷地の周囲には用水が巡らされているが、東側の用水は等高線は逆の北に向かって流れている点は特徴的である。屋敷地の規模は東西約40m、南北約70mほどである。

同地内には中澤の姓をもつ家は多いが、旧観を残しているのは同屋敷地のみであり、同地が中澤氏屋敷跡である可能性が高い。

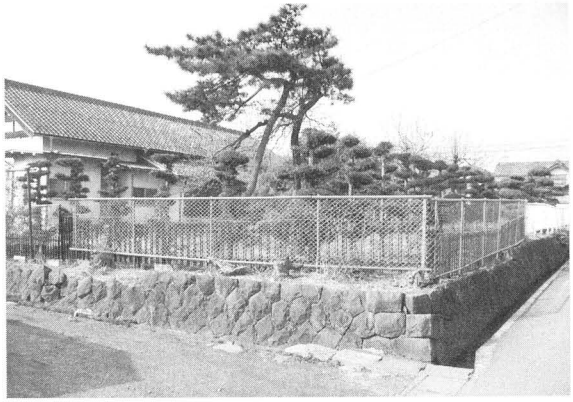


写真９　中澤五郎右衛門屋敷跡

河西五郎右衛門屋敷跡推定地　布施字小井川に所在する。現在、河西富夫氏の邸宅になっている。東西約50m、南北約90mの規模を有する方形区画を呈し、屋敷地には用水が取り込まれている。付近を走る南北の街道が屋敷地の北側で東に折れており、屋敷地との関係も意識的である。土塁等の防御施設はみあたらない。

当地を河西氏の屋敷跡に比定する直接的資料はないが、屋敷地の形状やそのありかた等から在地土豪層の屋敷跡であった可能性があり、参考に提示しておきたい。

田中氏屋敷跡　東花輪に所在する屋敷跡。現在の田中喜幸氏宅及び樋泉昌起氏宅付近が推定される。両氏宅の間を清川が流れ、両氏宅北側にもかつては堀状施設が存在していたという。東側は道路やＪＲ身延線敷地となり、かつての様子は失われている。田中弥三左衛門（『甲斐国志』所載）や田中与右衛門尉守茂に関わる屋敷跡と伝えられている。

なお同書には、田中弥三左衛門家はのちに樋泉に姓を改められたと記録されている。

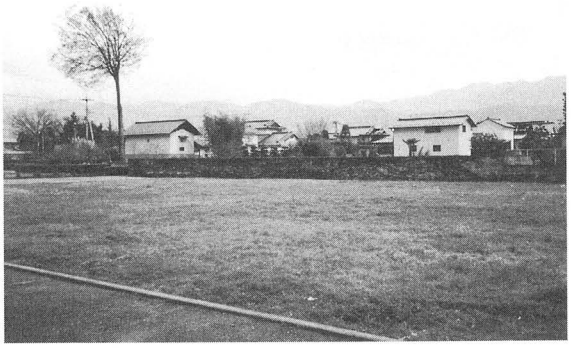


写真10　田中氏屋敷跡（遠方建物付近）

今福氏屋敷跡　武田氏滅亡後も徳川氏の重臣の一人として活躍した今福氏の屋敷跡は、大輿神社裏一帯や同家の菩提寺である宝珠院の境内地が伝承地として残るが、現在はいずれも痕跡が認められない。

小池監物屋敷跡　臼井阿原に所在する小池氏宅が同屋敷の可能性もあるが、痕跡は残っていない。屋敷地の北側には上行寺墓地、東側には七面堂がある。

歴史的特質

本町では在地土豪層の屋敷が濃密に分布しており、典型的な「一村一屋敷」状態を示している。それはおそらく、中世とくに戦国期に盆地低地の開発が相当進み、肥沃な耕地が各所に展開していたことを物語るものであろう。これらの在地土豪層は武田氏の財政基盤の支えとなるとともに、その軍事的組織の一員に組み込まれ、戦国大名武田氏の軍事力として編成されていたのである。

本町はその一方では、釜無川や御勅使川などの大河川による水害に悩まされてきた地域として知られているが、そうした水害を克服するために三井氏らの在地土豪層が川除、すなわち治水事業に深く関わってきたことも注目すべき特色のひとつである。

第５節　堤防遺跡

堤防遺跡と堤防遺跡推定地

本町域では古くから洪水が頻発し、水との係わりを除いて町の歴史を語ることはできない。町内各地には河川関係の地名が数多く残り、住宅地や田畑のなかに取り残された堤防がみられ、堤防上が道路になっている箇所もある。また、もとは堤防であっても現在の地表面にその痕跡をとどめない場所も多い。それらはこの地に生きた人々が居住域や生産域を水害から守るために造営してきたもので、地域的発展の基礎であった。

平成10年に県教育委員会が刊行した『山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書』[(1)]（以下、『分布調査報告書』と略す）では、「現在の河川区域の外側にあり、堤防としての構造が現地で確認できるもの」を「堤防遺跡」と呼んでいる。また明治21年測量の旧帝国陸軍陸地測量部の地図（以下、「明治21年地図」と略す）や近世の古絵図および地元での伝承から堤防の存在が推定されるものに加え、道や土地区画の形状が堤防の存在を推定させるものも「堤防遺跡推定地」としている。

今回は『分布調査報告書』に掲載された町内の堤防遺跡等に加え、明治28年７月に調製された「山梨県中巨摩郡小井川村花輪村忍村全図」（田富小学校所蔵、以下「明治28年地図」と略す）や樋泉明氏・内藤和久氏をはじめ、地元の方々からご教示いただいた情報等をもとに町内の状況を示したい。

事例

堤防の構造が現地で確認できる堤防遺跡、および明治28年地図等によって堤防の位置が把握できる堤防遺跡推定についてつぎに概要を示す。明治21年地図には釜無川・笛吹川の現行堤防の位置や河川敷きの部分に堤防が描かれている。これらは堤防遺跡推定地であるが（『分布調査報告書』）、ここではそれら以外の事例について述べたい（番号は第10図と共通）。

1　鍛冶新居の集落を囲むように西側約400m、東側約200mの堤防が残り、天満神社の北側でその両者は交わる。釜無川に対する圭角の堤防であり、その形態は濃尾平野などにみられる舟形輪中に近く、鍛冶新居村の成立や維持に深く係わる堤防である。堤防上は道路等になっており、現状でも40～80cm程度の高さがある。安永６年（1777）の「山之神村明細帳」[(2)]によると「枝郷鍛冶新居村囲境」に「堤延長弐百七拾間余」とあり、この堤防に対応すると考えられる。集落を囲む部分の堤防は明治28年地図にみえるが、突端部から西側に斜めに延びている部分（現在、水神石碑が建つ）はこの地図にはみえず、大正６年の陸地測量部の地図に描かれている。

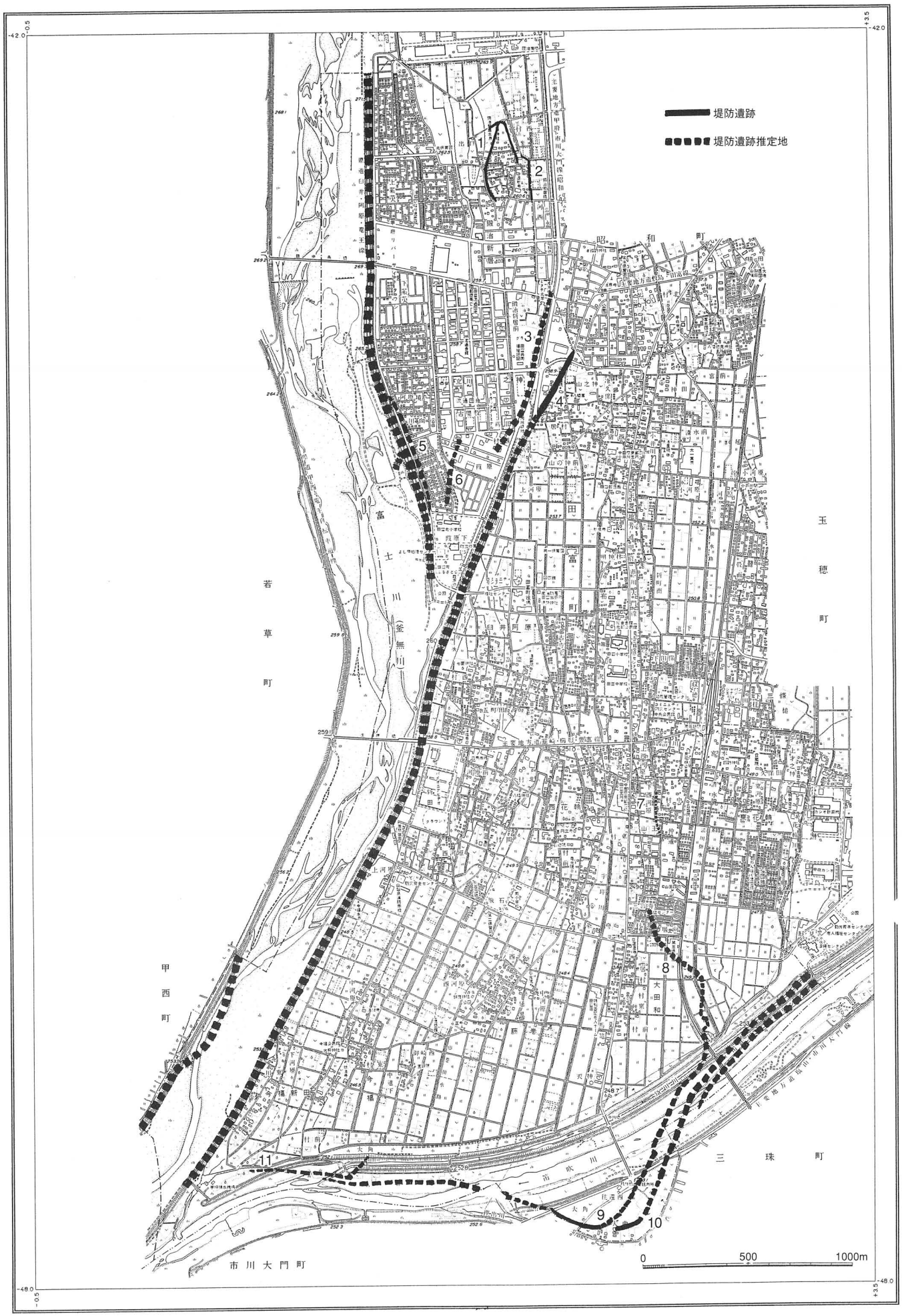
2　鍛冶新居集落東側の常永村（昭和町）境に位置する。１に隣接し鍛冶新居集落の南東側を守るため付設された堤防であろう。明治28年地図に堤塘として示され、現状では下幅３～４m、高さ40cmほどの規模で、表面には砂礫が盛られている。

3　常永川の旧堤防である。第10図には明治28年地図に示された河川部分と両岸の堤防の範囲を示す。

4　昭和町河西から続く霞堤であり、南側は現行堤防となっている。堤防上は道となり、現状では敷16.6m、馬踏5.3m、川表側の高さは3.4mを測る（『分布調査報告書』）。この堤防の川上端の河西地内では発掘調査され、近世から段階的に堤体が嵩上げされてきた状況が把握されている。[(3)]

5　明治28年地図には字阿原境で現行堤防のラインから分岐し、田富北小学校北西端付近でまた現行堤防と一体となる堤防が描かれている。現在は堤防脇の道や住宅地となっており、一段階古い釜無川左岸堤防であろう。

6　田富北小学校の北側には「字古堤敷」という南北に延びる帯状の区画がみられる（明治28年地図）。明治16年の「中巨摩郡花輪村略図」[(4)]（写真11）には、この付近に「字二ノ堤」と記された堤防が描かれ、この古堤敷



第10図　堤防遺跡等分布図

に対応する可能性が高い。しかし、明治28年地図では堤塘として扱っておらず、この段階では区画や地名は残ったものの堤防としての位置づけはすでに失われていたと推測される。

7　明治28年地図には東花輪の字村中と字下西河原の境目に堤塘として示された南北200mほどの細長い区画がみられ、同年の分間図[5]には水路の東側に堤防敷地と考えられる帯状の区画がみられる。文政11年（1828）6月の釜無川の洪水を発端に、東花輪村と大田和村・馬籠村・藤巻村・西花輪村の間で新堤造営をめくり相論がおきている。この経過については『田富町誌』[6]に詳しいが、寛政年中（1789～1801）より東花輪村が築堤を進めた地域は字壱本杉から西之河原通・山王といった村の西側と推測され、この明治28年地図に示された堤塘の近くであろう。相論を伴った近世の築堤とこの堤塘との関係は厳密には追求できないものの、この地域が水防上、東花輪村にとって、あるいは大田和村をはじめとする水下等の村々にとっても重要であったことはまちがいない。

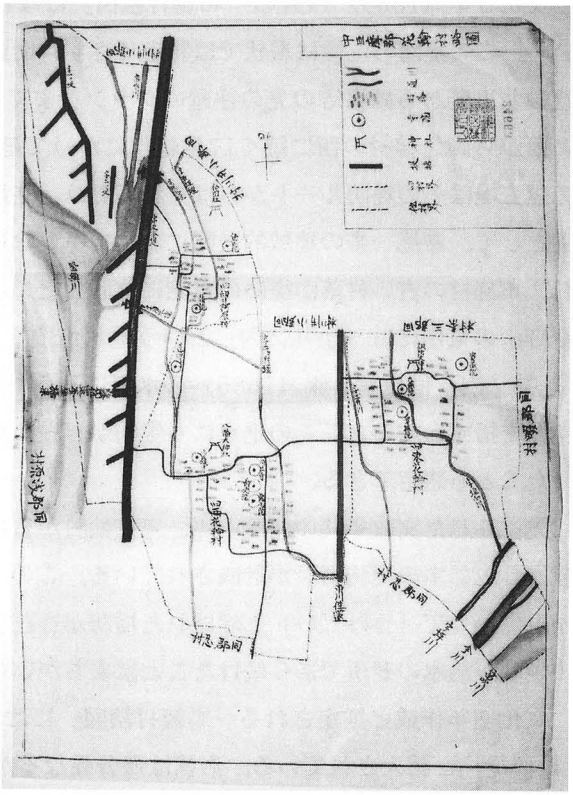


写真11　花輪村略図(明治16年、山梨県立図書館蔵)

8　明治28年地図には山王団地南東側から第三保育園の南側をとおり、身延線と笛吹川の交点へと延びる堤塘がみられ、文化3年（1806）10月の「大田和村絵図」[7]にもこれに近い堤防ラインが描かれている。同年の「東花輪村絵図」[8]にも大田和村境からはじまる堤防がみられ、「三宮司堤」と記入されている。安永6年（1777）の「大田和村明細帳」[9]に「笛吹川・宇坪川堤長千六間」と記載された上流側の部分であろうか。かつては「ささどい」とも呼ばれたといい、現在は宅地化や区画整理等によりその痕跡はほとんど残っていない。

9　8の下流側の堤防で、笛吹川との合流部分にあたる。大正6年に完成した河川改修工事で笛吹川が北側へ付け替えとなったため、この部分は同川の左岸となった。国道140号を挟む字大角側の部分は長さ約220mにわたり比較的良好に堤体が残存しているが、その川上側は削平されている。

10　今川の右岸堤防の延長部にあたり、笛吹川右岸に面していた堤防である。川下端は長さ約180mにわたり堤体が残存しているが、9と同様にその川上側のほとんどの部分は削平されている。

11　明治21・28年地図にみえる笛吹川右岸堤防である。この付近では笛吹川の流路が南側に変えられたため、現行堤防からは若干はずれた部分である。現地は現行堤防

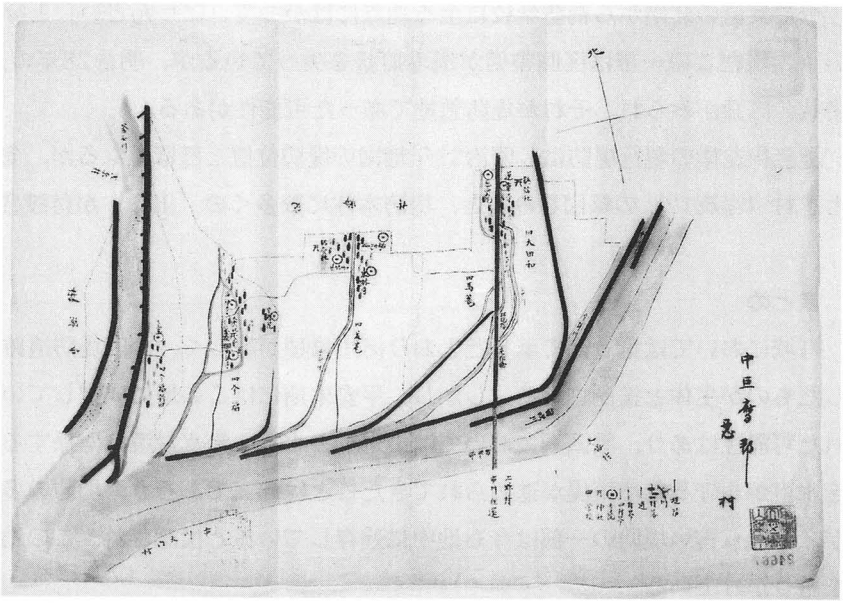


写真12　忍村略図(明治16年、山梨県立図書館蔵)

脇で全体的に盛り上がっているが、堤防を想起させるような帯状の高まりはみられない。

以上をまとめると１・２・４が堤防遺跡で、３・５・６・７・８・11が堤防遺跡推定地、９・10が堤防遺跡およびその推定地である。これらは現地表面に堤防の痕跡をとどめるもの、および現在は地表面にみえなくてもかつては存在し、その位置が近代的な地図等により把握できるものである。しかし、町内にはまだ数多くの古い堤防が地下に眠っていることは確実であり、今回の調査で知り得た情報をつぎに示したい。これらは近世の古絵図や伝承等によるもので、位置は厳密には把握できず地図上に明示することは控えたい。

文化３年（1806）11月の「布施村絵図」[10]には布施の宿の東側に線を描き、そこには「信玄堤」と記入されている。この堤防の位置は現状では特定できず、明治期の地図にも明確な痕跡はみられないが、絵図からは布施の辻の北東側から妙泉寺の先の往還のクランクまで直線的に南北に延びていた模様である。『甲斐国志』[11]は河西村の西から山之神村の西に続く17世紀代にかけて延長された釜無川左岸堤防まで「信玄堤」と呼んでいるが、この信玄堤はその堤防ルートからはずれており、立地的にはそれよりも古い可能性がある。信玄が造ったか否かは別として、布施一帯の地域的展開において重要な堤防である。この絵図には「信玄堤」の東に「古村」と記入され、布施村の古い村落が堤防の東側に位置したことを示し、注目される。この信玄堤と前述の７の堤防の間の字新町南の東側には「土井ノ内」という地名が残り、その脇を流れる水路を下流側では「土井川」と呼んでいる。「土井ノ内」は貞享２年（1685）の水帳にみられる古い地名である。[12]「土井」地名は屋敷に伴う場合もあるが、堤防を指すとすると、この地点にも堤防が存在した可能性があり、土井川のライン付近に不連続堤防が造られていたことも想定できる。

先にふれた文政年間の相論の際、東花輪村から提出された返答書によると、布施村地内字古寺家の五ヶ村用水堰通りへ二本の堤防新設が計画されている。この位置は特定できないが、古寺家の住宅地内を南北に通る道のラインにかつて「うけどい」と呼ばれた堤防が存在したという。この「うけどい」の成立時期は不明であるが、この地域が治水の要所であり続けたことはまちがいない。

文化初年作成と推定される「馬籠村絵図」[13]には、往還を起点に笛吹川に向けて弧状につながる堤防が描かれ、「内口堤」と記入されている。形状は幾分異なるが明治16年の「中巨摩郡忍村略図」[14]（写真12）にも往還から南西側に延び笛吹川に至る堤防が描かれている。この堤防は明治28年地図にはみえず、ほとんどの部分は大正期の笛吹川の改修工事により河川敷や現行堤防下となったと考えられる。

今福集落の北端から消防学校に至る地点にはかつて「にしんどい」と呼ばれた南北に延びる堤防が存在したという。現在この一帯は区画整備が進み旧状を失っているが、明治28年の分間図[15]には曲がりながら南北に連なる帯状の区画がみられ、それが堤防敷地であった可能性がある。

釜無川左岸の現行堤防は、明治21年地図の堤防位置とほぼ重なるが、先にふれた明治16年の花輪村（写真11）と忍村（写真12）の略図をみると、堤防本体に数多くの「出し」が付設されていたことがわかる。

まとめ

町域においては第２節で示したとおり河川堆積が著しく、今回堤防遺跡等として示した多くは近世以降に成立したものが主体と推測される。しかし、平安末期にはこの地に成立していた小井河庄や布施庄でも堤防が造営された可能性はあり、戦国期においては山之神の水害や治水対策に関係する史料[16]があり、古くから居住域や生産域を水害から守るため築堤が進められてきたことは確実であろう。堤防の多くは洪水によって失われる運命にあるが、それら古い堤防の一部は今も地中に残存していると推測され、この地域における往時の人々と水との係わりを語りかけている。

註

(1) 保坂康夫ほか『山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書』山梨県教育委員会、1998年。

(2) 『村明細帳』巨摩郡編Ⅱ（山梨県史資料叢書）、山梨県、1999年。

(3) 田中大輔『昭和町かすみ堤』昭和町教育委員会、1997年。

(4) 山梨県立図書館、頼生文庫所収。

(5) 田富町役場蔵。

(6) 『田富町誌』154～158頁、1981年。

(7) 内藤幹彦氏所蔵「甲斐国志草稿本及び編集諸資料」（『河内路・西郡路』山梨県歴史の道調査報告書第７集、山梨県教育委員会、1986年に掲載）。

(8) 註７に同じ。

(9) 註２文献。

(10) 註７に同じ。

(11) 『甲斐国志』巻之二十八山川部第九の「信玄堤」の項。

(12) 小井川村取調書（『若尾資料』山梨県立図書館蔵）。

(13) 註７に同じ。

(14) 註４に同じ。

(15) 註５に同じ。

(16) 三井家文書（『山梨県史』資料編４、1328・1329号文書、1999年）。

第６節　自然科学分析

放射性炭素年代測定

山　形　秀　樹（パレオ・ラボ）

１．はじめに

田富町試掘調査により検出された木片および植物片の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

２．試料と方法

試料は、№3黒灰色シルト層下部から出土した木片1点、№5黒灰色粗砂質土下底部から出土した木片１点、№8青灰色シルト層中から出土した木片1点、№6腐植土中から出土した植物片1点の併せて４点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した^{14}C濃度を用いて^{14}C年代を算出した。

３．結果

表１に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値－25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C年代値(yrBP)の算出は、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差(±1σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の^{14}C年代が、その^{14}C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い(^{14}Cの半減期5,730±40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正値は^{14}C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

４．考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した1σ暦年代範囲のうち、その確か

第２表　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	試料データ	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1284 (AMS)	木片 ① No.3 黒灰色シルト層下部出土	-25.3	640±20	cal AD 1300 cal AD 1370 cal AD 1380	cal AD 1300 - 1315 (29.4%) cal AD 1355 - 1385 (70.6%)
PLD-1285 (AMS)	木片 ② No.5 黒灰色粗砂質土下底部出土	-24.8	150±20	cal AD 1680 cal AD 1735 cal AD 1805 cal AD 1930 cal AD 1945	cal AD 1675 - 1690 (15.9%) cal AD 1730 - 1775 (50.4%) cal AD 1800 - 1810 (10.4%) cal AD 1920 - 1940 (21.3%)
PLD-1286 (AMS)	木片 ③ No.8 青灰色シルト層中出土	-24.3	220±20	cal AD 1660	cal AD 1655 - 1670 (48.2%) cal AD 1780 - 1795 (51.8%)
PLD-1311 (AMS)	植物片 No.6 腐植土中出土 6.15･6.45mボーリング	-26.4	1310±30	cal AD 685	cal AD 665 - 695 (46.0%) cal AD 700 - 715 (27.6%) cal AD 750 - 765 (26.4%)

らしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の^{14}C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

田富町試掘試料の花粉化石

鈴　木　　茂（パレオ・ラボ）

中巨摩郡田富町において町内遺跡分布調査の一環として試掘調査が実施され、その際土壌試料が採取された。この採取された土壌試料については当時の環境を知る資料を得る目的で以下に示す花粉分析の他、珪藻分析，プラント・オパール分析および年代測定が行われている。

1．試料と分析方法

分析用試料は小河原（地点№.3）、下田保（地点4）、宮本（地点5）および宝珠院境内（地点8）の4ヶ所より採取された4試料である。各試料について、試料1（地点№.3）は下部の黒灰色シルト（同層の年代測定試料①：640±20yrs BP）、試料2（地点№.4）は最下部の黒灰色シルト、試料3（地点№.5）は下部の黒灰色シルト（上位の年代測定試料②：150±20yrs BP、試料4（地点№.8）は下部の暗オリーブ褐色のシルト（最下部の年代測定試料③：220±20yrs BP）である。これら4試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～4g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

2．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉37、草本花粉33、形態分類を含むシダ植物胞子4、藻類1の総計75である。これら花粉・シダ植物胞子・藻類の一覧を第3表に、それらの分布を第11図に示した。なお、分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉とシダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、花粉化石の単体標本を作成し、各々にPLC.SS番号を付して形態観察用および保存用とした。

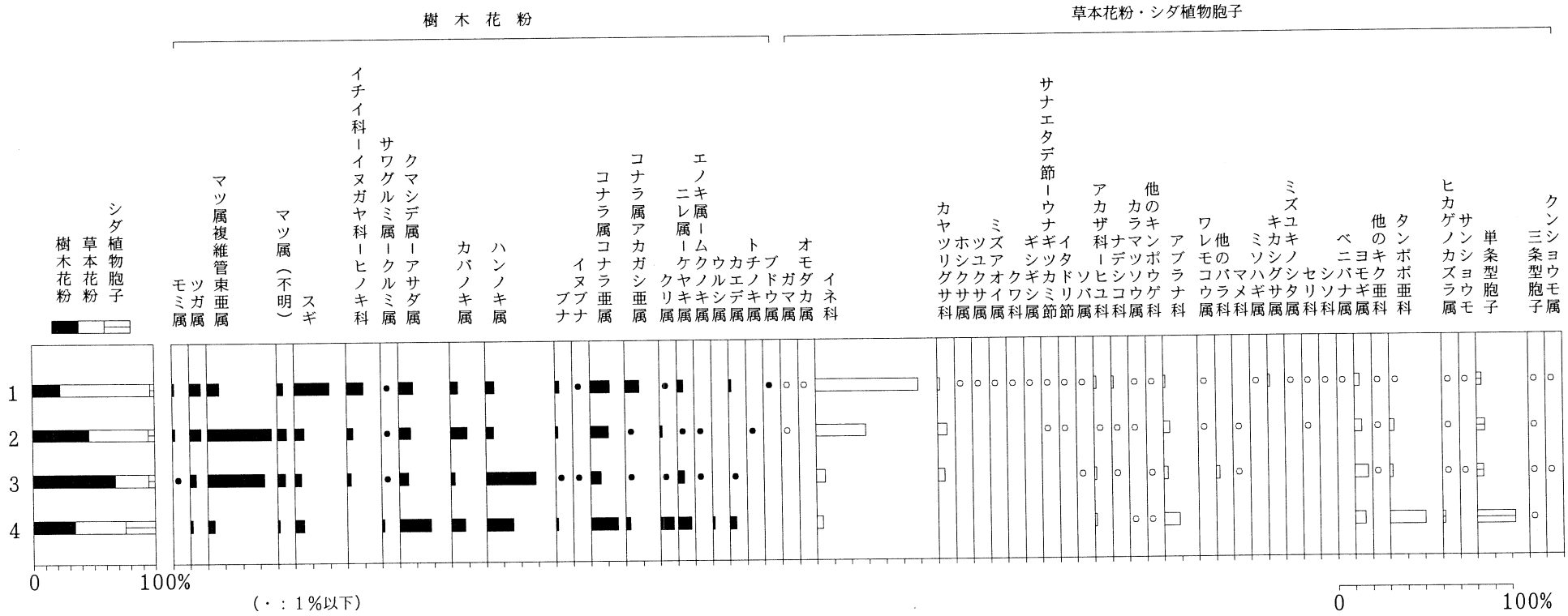
試料1（地点№.3）はスギの優占で特徴づけられるが、出現率は20％を越えたくらいでそれほど高くはない。出現率が10％前後を示す分類群が多く、ツガ属，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す），クマシデ属－アサダ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属が含まれる。最も多く検出されたのは草本類のイネ科で60％弱を示している。その他はいずれも低率で、そのなかに水生植物のガマ属，オモダカ属，ミズアオイ属（いずれも抽水植物）が観察される。また出現率は1％以下であるが、ソバ属が7個体と花粉生産数の少ないソバ属としては比較的多く得られている。その他、ベニバナ属が1個体のみであるが産出しており、図表には示していないが寄生虫卵の鞭虫卵も観察されている。

試料2（地点№.4）はマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）の優占で特徴

第３表　産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4
樹木					
モミ属	*Abies*	3	3	2	-
ツガ属	*Tsuga*	14	13	10	1
トウヒ属	*Picea*	1	-	1	-
カラマツ属	*Larix*	1	-	-	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	1	1	1	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	15	74	89	3
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	8	11	12	1
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	1	-	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	43	11	10	4
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	21	7	6	-
ヤナギ属	*Salix*	1	-	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	2	1	1	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	18	14	15	14
ハシバミ属	*Corylus*	-	-	2	-
カバノキ属	*Betula*	9	19	6	6
ハンノキ属	*Alnus*	11	9	78	12
ブナ	*Fagus crenata* Blume	5	3	2	1
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	2	-	2	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	24	21	16	12
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	18	2	1	2
クリ属	*Castanea*	1	3	1	6
シイノキ属	*Castanopsis*	-	1	-	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	8	2	11	6
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	1	1	-
フサザクラ属	*Euptelea*	1	-	-	-
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	1
モチノキ属	*Ilex*	-	1	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	-	1	-
カエデ属	*Acer*	3	-	2	3
トチノキ属	*Aesculus*	-	1	-	-
ブドウ属	*Vitis*	1	-	-	-
ツタ属	*Parthenocissus*	-	1	-	-
シナノキ属	*Tilia*	-	2	-	1
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	3
ウコギ科	Araliaceae	1	-	2	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	1	-	-
トネリコ属	*Fraxinus*	1	-	-	-
草本					
ガマ属	*Typha*	3	1	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	2	-	-	-
イネ科	Gramineae	547	124	20	8
カヤツリグサ科	Cyperaceae	13	24	15	-
ホシクサ属	*Eriocaulon*	1	-	-	-
ツユクサ属	*Commelina*	1	-	-	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	5	-	-	-
クワ科	Moraceae	1	-	-	-
ギシギシ属	*Rumex*	1	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	1	2	-	-
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	1	2	-	-
ソバ属	*Fagopyrum*	7	-	1	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	13	2	5	3
ナデシコ科	Caryophyllaceae	13	2	1	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1	1	-	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	1	-	3	2
タケニグサ属	*Macleaya*	1	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	11	16	9	20
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	1	1	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	9	-
マメ科	Leguminosae	-	1	2	-
ミソハギ属	*Lythrum*	1	-	-	-
キカシグサ属	*Rotala*	13	-	-	-
ミズユキノシタ属	*Ludwigia*	1	-	-	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	-	1	-
セリ科	Umbelliferae	2	1	-	-
シソ科	Labiatae	1	-	-	-
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	1	2	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	1	-
ベニバナ属	*Carthamus*	1	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	28	18	31	13
他のキク亜科	other Tubuliflorae	7	4	1	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	6	11	7	45
シダ植物					
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	2	1	3	3
サンショウモ	*Salvinia natans*	1	-	1	-
単条型胞子	Monolete spore	27	20	15	49
三条型胞子	Trilete spore	1	2	2	2
緑藻類					
クンショウモ属	*Pediastrum*	1	-	3	-
樹木花粉	Arboreal pollen	214	202	272	77
草本花粉	Nonarboreal pollen	684	211	108	92
シダ植物胞子	Spores	31	23	21	54
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	929	436	401	223
不明花粉	Unknown pollen	24	9	10	15

Ｔ．－Ｃ．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す



第11図　花粉化石分布図

（樹花粉は樹木花粉総数、草木花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

づけられる。次いでコナラ亜属が多く、出現率は10％弱である。その他、ツガ属，クマシデ属－アサダ属，カバノキ属が５～10％を示しており、試料１で優占していたスギは５％以下となっている。草本類について、イネ科は試料１に比べ半減しているが30％弱の出現率を示している。その他の分類群はやはり低率で、抽水植物のオモダカ属やミズアオイ属も観察されていない。

試料３（地点№.５）もニヨウマツ類の優占で特徴づけられるが、加えてハンノキ属も30％弱と高い出現率を示している。また本試料においてもスギは約４％と低率である。草本類はいずれも少なく、最も多いヨモギ属でも10％に達していない。また上記した水生植物も得られていないが、ソバ属が１個体のみであるが地点１に続き観察されている。

試料４（地点№.８）は検出できた花粉化石数が他の試料に比べかなり少なく、突出した出現率を示す分類群もみられなかった。そのなかではクマシデ属－アサダ属，ハンノキ属，コナラ亜属が10～20％得られている。その他カバノキ属，クリ属，ニレ属－ケヤキ属などが10％弱を示している。一方試料２,３で優占していたニヨウマツ類は５％に達しておらず、スギはやっと５％を越えたくらいである。草本類ではタンポポ亜科が最も多く、出現率は20％を示している。次いでアブラナ科が約９％、ヨモギ属が約６％を示しており、シダ植物の単条型胞子も約22％と多産している。

３．試掘地点周辺の古植生

試料１（地点№.３）：スギが最も多く、ツガ属やヒノキ類などを交えた温帯性針葉樹林が周辺丘陵部に広く成立していたと推測される。またコナラ亜属を中心にクマシデ属－アサダ属，ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹林も一部に成立しており、アカガシ亜属などの常緑広葉樹類もみられたであろう。一方低地部ではイネ科が多産しており、水田雑草を含む分類群（オモダカ属やミズアオイ属など）も得られており、プラント・オパール分析においてもイネが多く観察されていることなどから水田稲作が行われていた可能性は非常に高いと判断される。また周辺においてソバの栽培も行われていた可能性も考えられる。なお同層準より得られた木片について年代測定が行われ、640±20yrs BP（PLD-1284）が得られている。

試料２（地点４）：ニヨウマツ類が最優占しており、周辺丘陵部や微高地上にはこのニヨウマツ類の二次林が成立していたとみられる。またコナラ亜属も同様に二次林（雑木林）を形成していたと推測される。低地部の植生について、イネ科花粉は水田稲作が考えられる試料１に比べ半減しているものの依然として高い出現率を示しており、イネのプラント・オパールも多く観察されている。しかしながら上記した水田雑草を含む代表的な分類群は得られておらず、珪藻分析においては流水環境が推定されている。よって地点４における水田稲作についてその可能性は低いように思われ、花粉やプラント・オパールは周辺の稲作地より流水などでもたらされたのではないかと思われる。

試料３（地点５）：地点４と同様に周辺丘陵部や微高地上にはニヨウマツ類の二次林が成立していたとみられる。また本試料ではハンノキ属がニヨウマツ類に次いで多く観察されている。このハンノキ属は湿地林や河畔林を形成する代表的な樹種であり、地点５付近はそうした環境であった、あるいはそうした環境が一部にみられたと推測される。また、プラント・オパール分析においてイネが多産しているものの、イネ科花粉は低率であり、水田雑草を含む分類群も得られていない。珪藻分析では地点４と同様に流水環境が推定されている。よってイネのプラント・オパールはやはり周辺部よりもたらされたと思われ、本地点における稲作の可能性は低いと判断さ

れよう。なお本試料の上位層より得られた木片について行われた年代測定結果、150±20yrs BP（PLD-1285）が得られており、ニヨウマツ類の多産と時代的には矛盾しないと考える。

試料４（地点８）：花粉分析の結果からはクマシデ属－アサダ属，コナラ亜属，クリ属，ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹林が周辺丘陵部に成立していたと考えられる。しかしながら本地点において観察された花粉化石は傷んでいるものが多く、検出花粉数も他試料に比べかなり少なくなっている。また比較的多く観察されているタンポポ亜科や単条型胞子は比較的乾燥した所での生育が考えられ、地点８付近は乾陸化していたことが考えられる。よってその影響で花粉化石の一部は分解消失している可能性があり、当時の植生を正しく記録していないことが考えられることから、上記した落葉広葉樹林の優勢についてはさらに検討が必要と考える。なお、アブラナ科も他試料に比べやや多く観察され、形態からの分類は難しいがこれまでの観察経験からすると栽培種、すなわち畑作が予想され、これも先の乾陸化を支持するものと思われる。

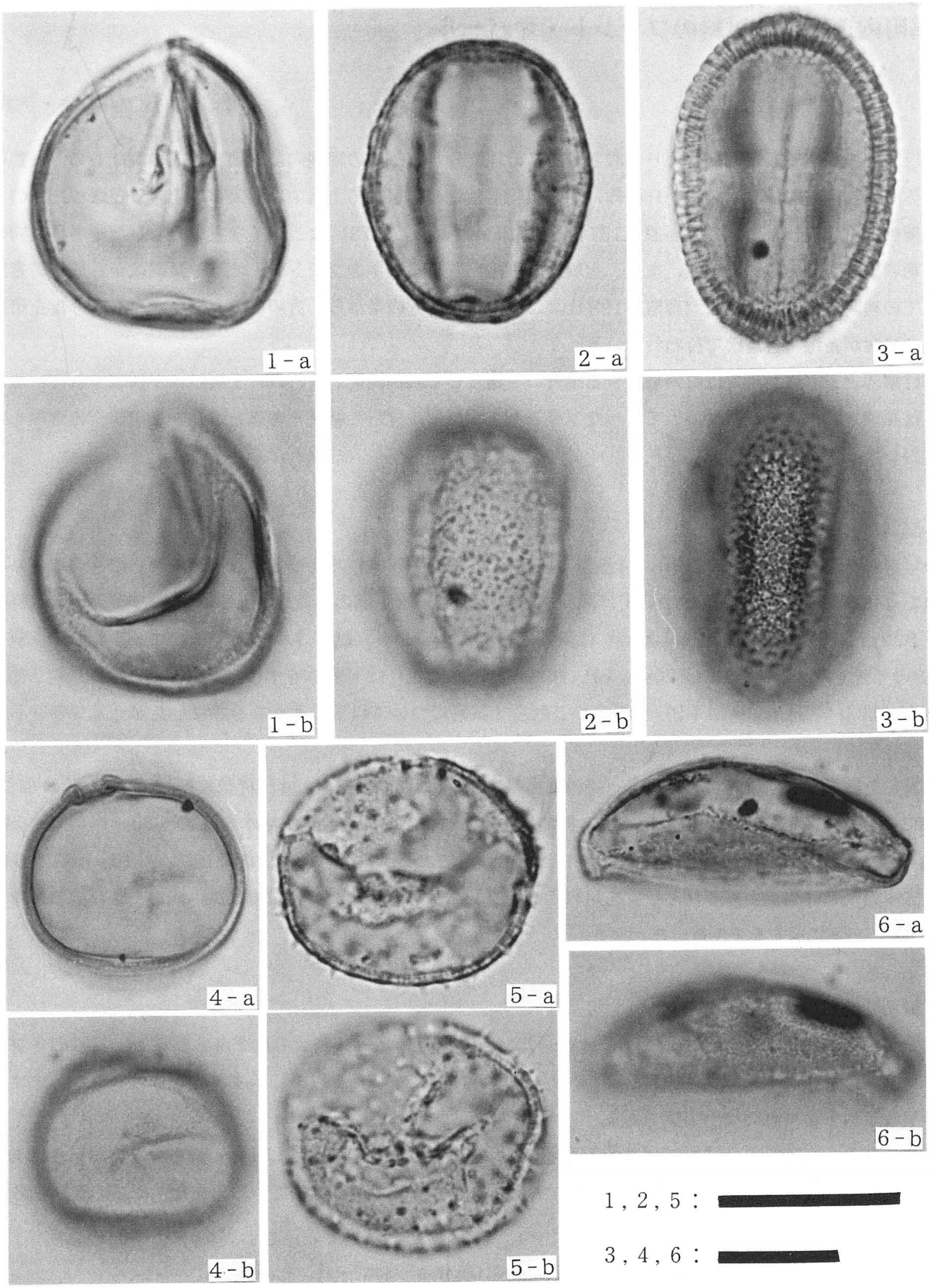


写真13　田富町内試掘試料No.1の花粉化石（scale bar：20μm）

1：スギ　PLC.SS 3157
2：コナラ属コナラ亜属　PLC.SS 3153
3：ソバ　PLC.SS 3155
4：イネ科　PLC.SS 3154
5：オモダカ属　PLC.SS 3152
6：ミズアオイ属　PLC.SS 3156

田富町内遺跡調査試料のプラント・オパール

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

プラント・オパールとは、根より吸収されたこの珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壌中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原　1984）。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。

中巨摩郡田富町においては町内遺跡分布調査の一環として試掘調査が行われ、土壌試料が採取されている。以下には採取された土壌試料について行ったプラント・オパール分析の結果・考察を示し、水田耕作の有無を中心に検討した。

1．試料と分析方法

分析用試料は№.3地点（小河原）、4地点（収徳）、5地点（宮本）および8地点（御崎西）の4ヶ所より採取された4試料である。各試料について、試料1（№.3地点）は下部の黒灰色シルト（同層の年代測定試料①：640±20yrs BP）、試料2（№.4地点）は最下部の黒灰色シルト、試料3（№.5地点）は下部の黒灰色シルト（上位の年代測定試料②：150±20yrs BP、試料4（№.8地点）は下部の暗オリーブ褐色のシルト（最下部の年代測定試料③：220±20yrs BP）である。これら4試料について以下のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

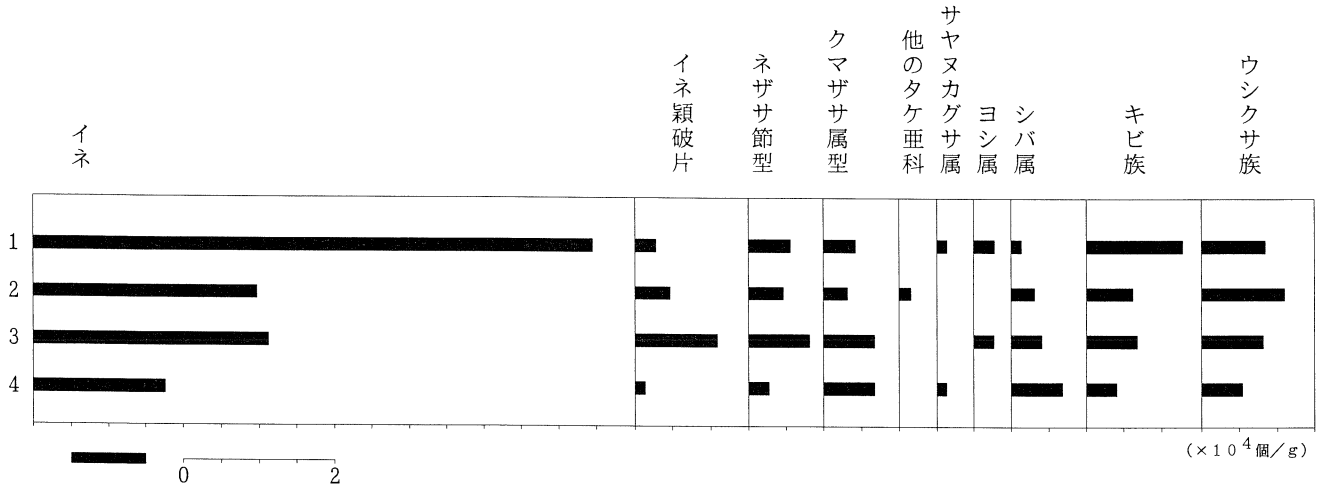
2．分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（第4表）、それらの分布を第12図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。個数としては、最も少ない試料4においても約18,000個を示すなど非常に多くのイネのプラント・オパールが得られている。また、イネの穎（籾殻）に

第4表　試料1g当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ（個/g）	イネ穎破片（個/g）	ネザサ節型（個/g）	クマザサ属型（個/g）	他のタケ亜科（個/g）	サヤヌカグサ属（個/g）	ヨシ属（個/g）	シバ属（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）	不明（個/g）
1	74,500	2,800	5,600	4,200	0	1,400	2,800	1,400	12,600	8,400	12,600
2	29,700	4,700	4,700	3,100	1,600	0	0	3,100	6,300	10,900	7,800
3	31,200	10,900	8,100	6,800	0	0	2,700	4,100	6,800	8,100	6,800
4	17,600	1,400	2,700	6,800	0	1,400	0	6,800	4,100	5,400	8,100



第12図　プラント・オパール分布図

形成される珪酸体の一部破片も全試料で観察されている。

イネ以外は全般に検出個数は少なく、10,000個を越えるのは試料１のキビ族と試料２のウシクサ族のみで、他試料やネザサ節型，クマザサ属型，ヨシ属，シバ属などは5,000個前後を示している。そのうちキビ族はイネが大量に検出されている試料１で約13,000個とキビ族としては多く得られている。

３．稲作について

上記したように、全試料より多数のイネのプラント・オパールが検出されている。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネのプラント・オパールが試料１ｇ当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原　1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。今回の４試料においては、少ない試料でも約18,000個といずれも5,000個をはるかに越える個数が得られており、各試料層準とも検出個数からは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。

ここで花粉分析結果をみると、試料１では大量のイネ科花粉とともに水田雑草を含む分類群であるオモダカ属・ミズアオイ属・キカシグサ属なども検出されている。よって花粉分析結果も試料１については水田稲作を支持する結果を示していると考える。しかしながら他の３試料についてはイネ科花粉の検出数も試料１に比べかなり少なく、上記した水田雑草類を含む主要な分類群も検出されていない。こうしたことから試料２～４については各層準において稲作が行われていた可能性は低いと推測される。

４．遺跡周辺のイネ科植物

年代測定結果から中世と考えられる頃の№３地点においては上記したように水田稲作が行われており、この水田内には水田雑草のオモダカ属やミズアオイ属(花粉分析参照)、キビ族のタイヌビエなどが生育し、周辺水路にはヨシやツルヨシといったヨシ属がみられた。また畦にはシバ属（ノシバなど）が認められ、水田周辺の比較的乾いたところにはネザサ節型のササ類（アズマネザサ、ゴキダケなど）やウシクサ族（ススキ、チガヤなど）が生育していた。

なお、キビ族についてはその形態からアワ，ヒエ，キビといった栽培種によるものか、エノコログサ，スズメノヒエ，タイヌビエなどの雑草類によるものか現時点では分類が難しく不明であるが、少なくとも水田稲作が予

想されている№.3地点の試料1層準においては水田雑草類（タイヌビエなど）に由来するキビ族と考える。

5．ネザサ率について

早田（1997）は気候の指標としてネザサ率を利用している。このネザサ率について、クマザサとネザサの植物体推定生産量の和に対するネザサの植物体推定生産量の比率をこう呼んでいる。また、早田（1997）は、このネザサ率の変化はすでに花粉分析の結果から推定されている約3万年前の比較的温暖な時期、2万年前前後の最終氷期の亜氷期、さらに約1万年前の急激な温暖化などが顕著に表れており、気候変化の基準とされているδ^{18}Oカーブによく似ていると述べている。

こうしたことから早田（1997）に示されているネザサ率の計算式を用いて田富町の4試料についてもネザサ率を算出した結果、試料1は46％，試料2が49％，試料3が43％，試料4が20％であった。よって試料1～3は温暖と寒冷の中間あたりの気候で、試料4は冷涼な気候とネザサ率からは判断されることになるのであろうか。筆者はこのネザサ率についてはあまり理解してはいないため、ここではネザサ率を示すのみに止め、気候についての判断は現時点では差し控えたいと考える。

引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）―数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用―先史時代の水田址探査―．考古学ジャーナル，227，p.2-7.

藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）―イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状―．考古学と自然科学，11，p.9-20.

早田　勉（1997）テフラ層序とタケ亜科植物珪酸体の組成変化からみた宮城県高森遺跡の年代．富士竹類植物園報告，41，p.78-97.

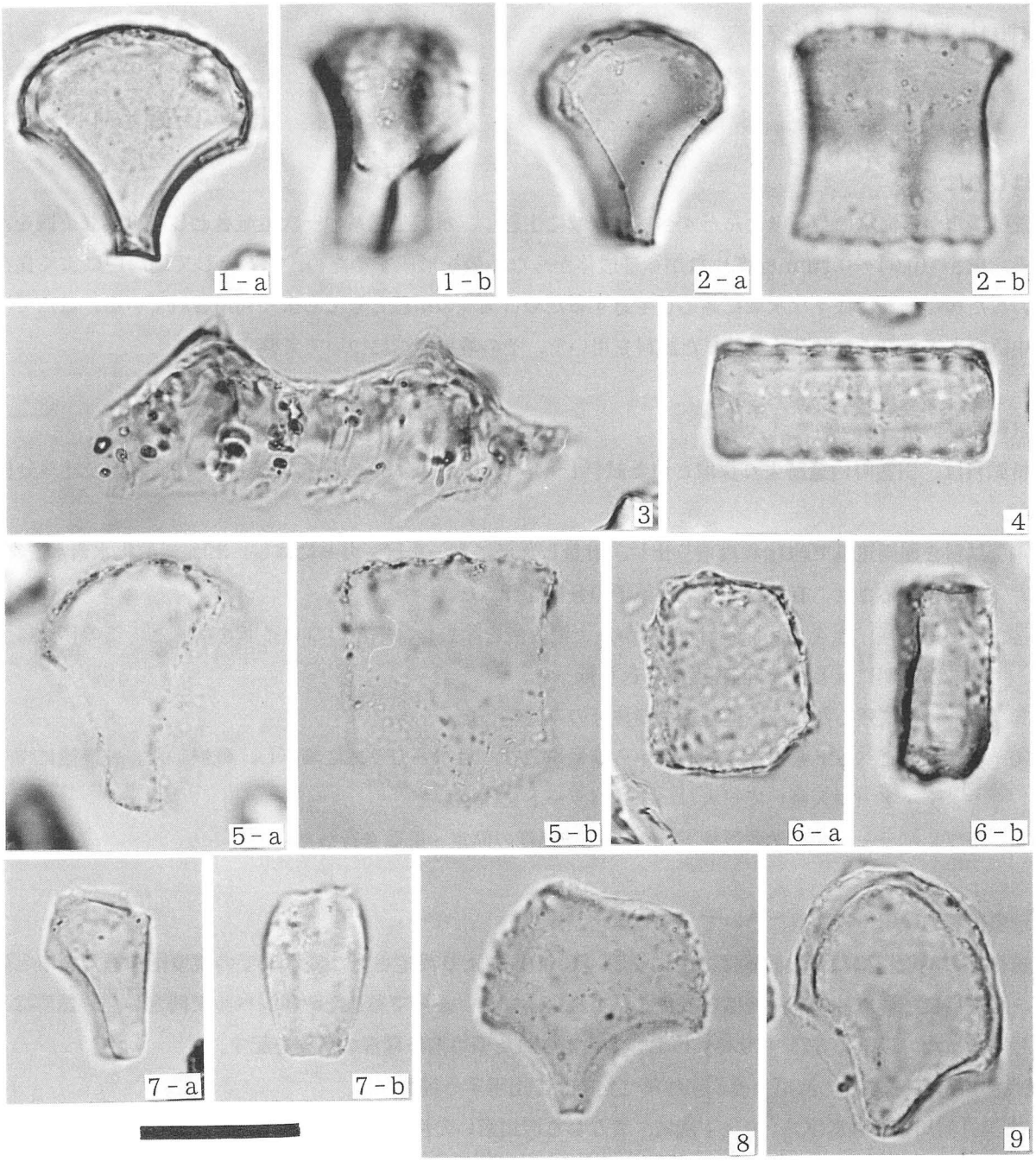


写真14　田富町内試掘試料のプラント・オパール（scale bar：30 μm）

1,2：イネ（a：断面、b：側面）1：No.1，2：No.3
3：イネ穎部破片　No.3
4：キビ族（側面）No.1
5：ネザサ節型（a：断面、b：側面）No.2
6：クマザサ属型（a：断面、b：側面）No.4
7：ウシクサ族（a：断面、b：側面）No.3
8：シバ属（断面）No.3
9：ヨシ属（断面）No.1

田富町内遺跡の珪藻化石

黒澤　一男（パレオ・ラボ）

1．はじめに

珪藻は淡水から海水に至るほとんどすべての水域に生息し、水域生態系の一次生産者として重要な位置を占めている。微小（0.01～0.1mm程度）ながら珪酸体からなる殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。また種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。ここでは山梨県中巨摩郡田富町内遺跡から採取した試料を用いて、その堆積環境について考察する。

2．試料及び分析方法

分析試料は、田富町内遺跡より採取された試料1～4（地点3，4，5，8）の4試料について以下の珪藻分析を行った。

① 試料を湿潤重量で約1g程度取り出し、計量した後にトールビーカーに移し、30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

② 反応終了後、水を加え、1時間してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回程度繰り返し行った。

③ ビーカーに残った残渣は遠心管に細粒分のみ回収した。

④ マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥した。乾燥後にマウントメディア（封入剤）で封入し、プレパラートを作成した。

⑤ 各プレパラートを光学顕微鏡下1000倍で珪藻種の同定・計数を行った。

3．珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群の設定は、主に安藤（1990）により設定された淡水域での環境指標種群をもとに行った。環境指標種群以外の珪藻種は広域種として扱い、また、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に安藤（1990）において設定された環境指標種群の概要を記す。

[上流性河川指標種群(J)]：河川上流の渓谷部に集中して出現する種群。

[中～下流性河川指標種群(K)]：中～下流域、すなわち河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群。

[最下流性河川指標種群(L)]　：最下流域の三角州の部分に集中して出現する種群。

[湖沼浮遊性指標種群(M)]：水深が1.5m以上で、水生植物が水底には生息していない湖沼に生息する種群。

[湖沼沼沢湿地指標種群(N)]　：水深が1m内外で、湿地および植物が一面に繁茂しているところに生息する種群。

[沼沢湿地付着生指標種群(O)]：沼沢ならびに前述した湿地において付着状態で優勢な出現が見られる種群。

[高層湿原指標種群(P)]：ミズゴケを種とした植物群落および泥炭地の発達が見られる場所に出現する種群。

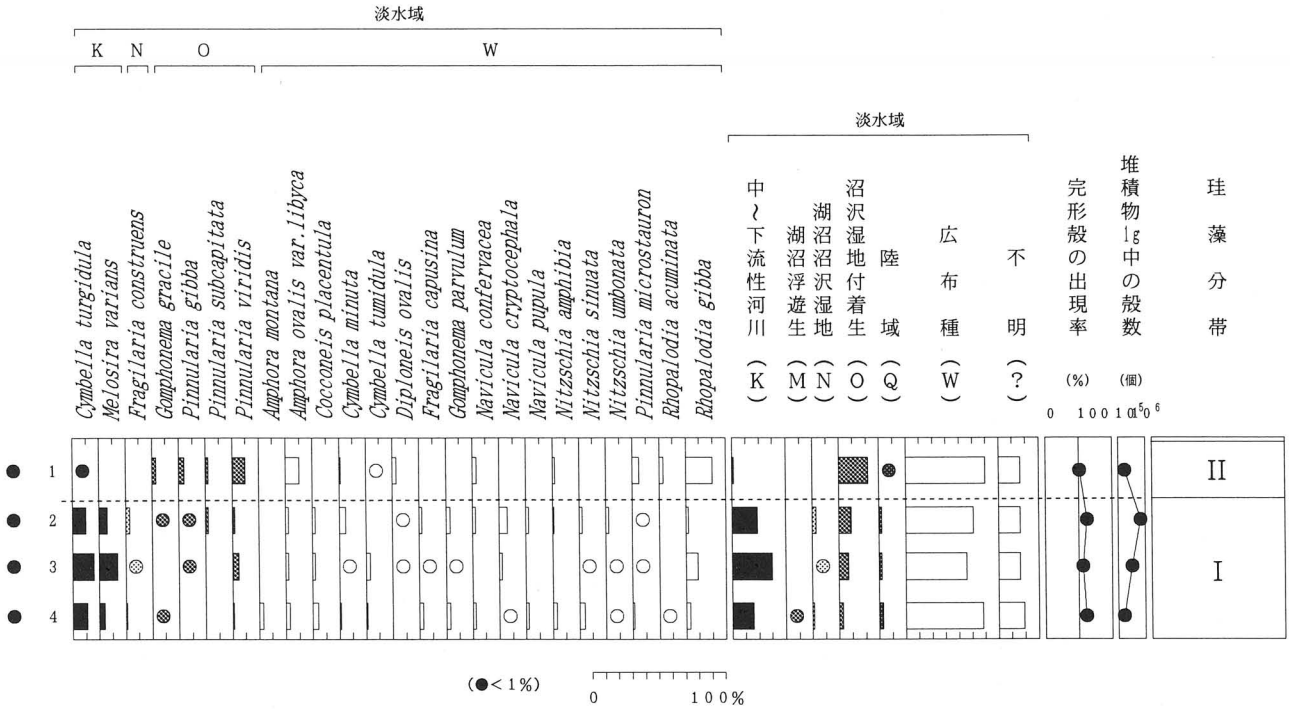
[陸域指標種群(Q)]　：前述の水域に対して、陸域を生息域として生活している種群（陸生珪藻）。

4．珪藻化石群集の特徴および推定される堆積環境

以下に田富町内遺跡における珪藻群集の特徴とその堆積環境について述べる。

検出された珪藻化石淡水種は、100分類群26属86種5亜種である。これらの珪藻種から設定される環境指標種群は、淡水域の広域種を含め6種群である。ここでは各試料に対し環境指標種群の出現傾向の特徴からⅠ、Ⅱ帯

に分帯した。以下にその特徴と堆積環境について述べる。



第13図　珪藻化石分布図

【Ⅰ帯：試料2、3、4（地点4、5、8）】

これらの試料中からは中～下流性河川指標種群が比較的多く検出される。堆積物1g中の珪藻殻数は1.63×105～6.43×105個、完形殻の出現率は56～62％である。特徴的に検出される珪藻化石は、中～下流性河川指標種群のCymbella turgidulaやMelosira variansなどや広域種群である。また、沼沢湿地付着生種群を随伴する。

こうしたことから沼沢湿地環境を伴う河川環境であったことが推定される。

【Ⅱ帯：試料1（地点3）】

堆積物1g中の珪藻殻数は1.63×105個、完形殻の出現率は51％である。特徴的に検出される珪藻化石は、広域種群の*Rhopalodia gibba*, *Amphora ovalis var. libyca*や沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*, *Pin. gibba*などである。

これらのことから沼沢地または湿地環境であったと推定される。

5．まとめ

田富町内遺跡において珪藻分析を行った結果、地点3(試料1)は沼沢湿地環境、地点4、5、8(試料2、3、4)は沼沢湿地を伴う河川環境であったと推定される。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理、42、73-88。

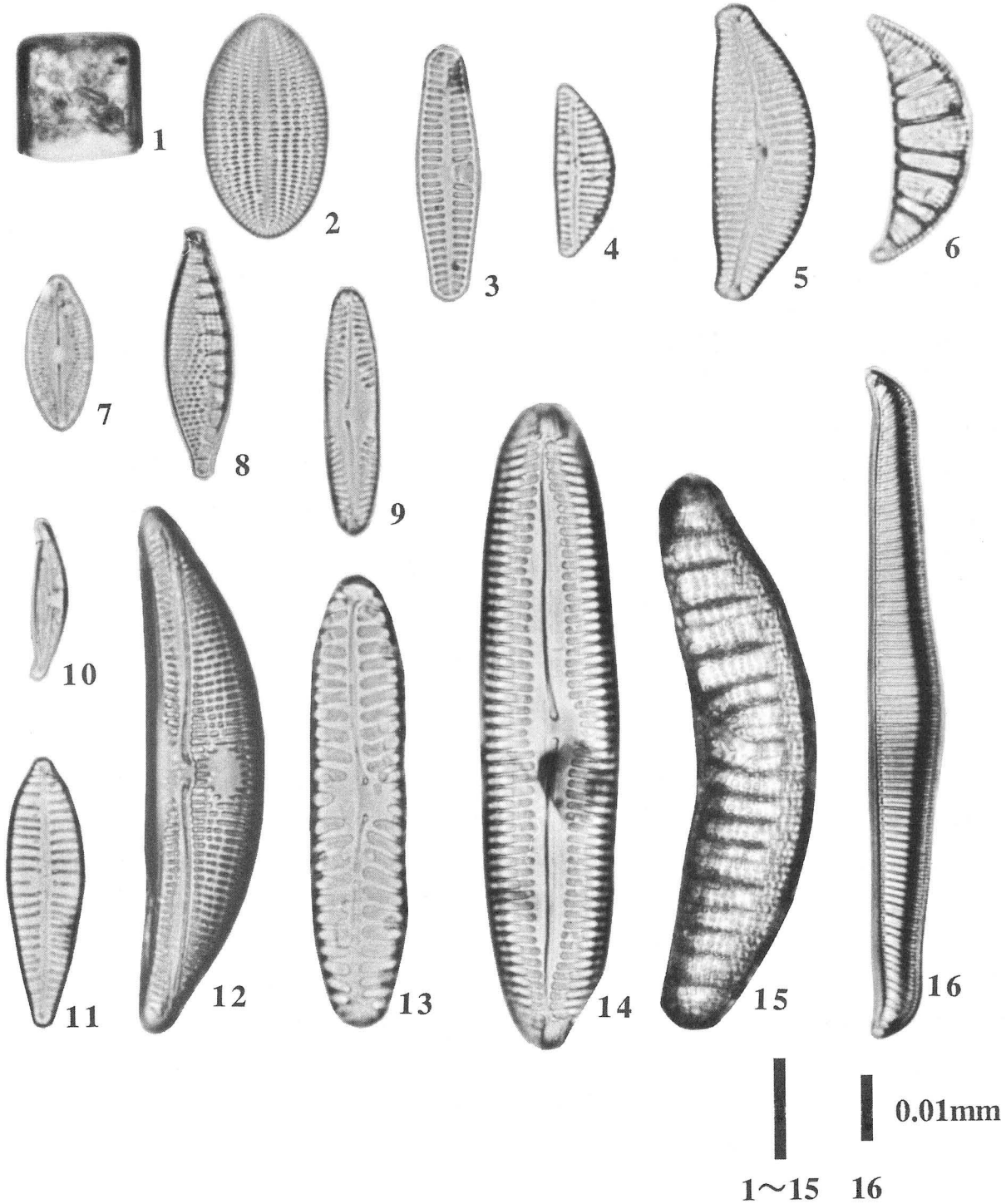


写真15　珪藻化石の顕微鏡写真

1 *Melosira unbigua*（試料3）
2 *Cocconens placentula*（試料4）
3 *Achnanthes lanceolata*（試料1）
4 *Cymbella minuta*（試料2）
5 *Cymbella turgidula*（試料3）
6 *Phopalodia sp.*（試料2）
7 *Navicula confervacea*（試料1）
8 *Nitzschia sinuata var. delognei*（試料4）
9 *Pinnularia subcapitada*（試料1）
10 *Amphora montana*（試料4）
11 *Gomphonema parvulum*（試料2）
12 *Amphora ovalis var. libyca*（試料1）
13 *Pinnularia borealis*（試料3）
14 *Pinnularia viridis*（試料3）
15 *Epithemia adnata*（試料3）
16 *Rhopalodia gibba*（試料3）

第５章　まとめ

以上のように本町では、今回の詳細分布調査によって16ヶ所の新たな遺跡が確認され、さまざまな成果を得ることができた。また、本町の歴史を語るうえで新たな検討課題も生まれてきたが、ここではそれらの一端を述べてまとめとしたい。

今回の詳細分布調査は、盆地の最南端に位置するという本町の特質から、地下に埋蔵されている埋蔵文化財のほかに、在地土豪層の城館跡や河川堤防跡などにも特に留意し実施した。その結果、宅地化が著しく、各種河川による堆積物が厚く重なっている条件下ではあったが、弥生時代から近世に至る16ヶ所の遺跡のほか、多くの城館跡や堤防遺跡を確認することができた。

古代の記録によれば、本町にはすでに12世紀段階で「布施」「小井河」などの荘園名があらわれ、また中世になると各種の文書中にさまざまな地名が登場するなど、多くの文書史料から古代以来の盛んな開発が想定されていたのであったが、今回の分布調査の結果はそれらを具体的に裏づけるものとなった。地表面観察による遺跡の分布状況は第１表に示してきたが、並行して実施した花粉化石等の科学的分析結果からは湿地林や河畔林が広がる往時の地理的環境がみごとに浮かびあがり、また中世段階では稲作やソバ栽培の痕跡も確認されるなど、本町のより豊かな歴史景観を把握することができた。これらの調査成果から、おおよそ本町では、弥生時代ないし古墳時代ごろまでには人々が確実に定着し、その後平安期になると荘園が開かれるようになり、中世段階になると開発はさらに広範囲に進んでいった様子をうかがうことができるのである。今後の慎重な分析をなお必要とするのであるが、今回確認された条里型地割もそれらの直接的な反映であったのかどうか興味がつきない。

中世後半期を中心とする在地土豪層の屋敷跡が本町のほぼ全域に及んでいることが判明したのは驚きであった。概略は、第４章第４節の城館跡を参照されたいが、この土豪屋敷跡の濃密な分布状況や、また今福氏など戦国期に有力武士層を輩出した背景には他地域に引けをとらない、あるいはそれを上回るかなり安定した開発が行われていたことを想定させるのである。

一方、本町の各所からはさまざまな堤防遺跡が確認された。本町域は釜無川水系と笛吹川水系が交差する付近に位置する関係上、古来より多くの水害に悩まされ続けた地域でもあったが、これらの堤防遺跡の存在はそのまま人々の血の滲むような水との闘いの証であり、それらを克服しつつ発展してきた本町を最も象徴する重要な歴史遺産でもある。

本町をはじめとする甲府盆地の低地は、従来からとかく遺跡は希薄とされ、歴史的にも空白地域ととらえられがちであったが、今回の詳細分布調査の成果はこれをくつがえし豊かな歴史の歩みを浮かびあがらせることになった。それらを一層確実なものにするためにはなお継続した調査研究が必要であろうが、今回の成果は本町の歴史解明にとどまらず、本県の歴史全体をより豊かに、より奥行きのあるものにしていくのは確かであろう。

報　告　書　抄　録

ふりがな	やまなしけんなかこまぐんたとみちょう ちょうないいせきしょうさいぶんぷちょうさほうこくしょ
書名	山梨県中巨摩郡田富町　町内遺跡詳細分布調査報告書
編著者名	萩原三雄・畑大介・村石眞澄・森原明廣・山下孝司・閏間俊明・ 秋山圭子・鈴木茂・保坂康夫・山形秀樹・黒澤一男
発行者	田富町教育委員会
所在地・電話	〒409-3892　山梨県中巨摩郡田富町臼井阿原301-1　055-274-7120
印刷所	㈱エンドレス
発行日	2002年３月31日
所在地	山梨県中巨摩郡田富町
	25,000分の1地形図　甲府・市川大門
	市町村コード　１９３８５２１
調査原因	国庫補助・県補助遺跡詳細分布調査事業
調査期間	2001年10月22日～2002年２月20日
調査対象	田富町内全域
主な遺跡	遺跡16ヵ所（弥生時代１、古墳時代５、古代２、中世５、近世７）、戦争遺跡１ヵ所、堤防遺跡および推定地11ヵ所、城館跡７ヵ所

山梨県中巨摩郡田富町

町内遺跡詳細分布調査報告書

発　行　日　平成14年３月31日

編集・発行　田富町教育委員会
〒409-3892
TEL 055－274－7120

印　刷　所　㈱エンドレス
〒405-0014　山梨県山梨市上石森123
TEL 0553－22－4574